

# 年 報

平成22年度

平成23年 5 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

# 序

平成22年度における当センターの事業計画については、関係機関の御支援・御協力をいただきながら、取り組みをすすめてきた結果、計画した事業のすべてについて円滑に実施することができました。その概要について申し上げますと、はじめに、調査事業においては、28遺跡の発掘調査と報告書作成のため整理作業を実施し、3遺跡の発掘調査報告書を刊行いたしました。

本県における近年の発掘調査の傾向は、県公共事業の減少は引き続き見られるものの、国による新直轄事業の高速交通網整備に伴う事業が主体となっており、高速交通網の整備率が低い本県にとっては、その傾向はしばらく続くものと考えております。公共事業の円滑な進捗を図るためにも、今後予想される高速道路の整備状況や県の公共事業等の事業量を的確に把握しつつ、調査体制の整備に努めていかなければなりません。また、子どもの重要な施策である埋蔵文化財保護の重要性の周知や、埋蔵文化財を通して古代の人との心の交流の場を県民の皆さんに提供するとともに、引き続き県民の皆さんの目線に留意しながら、責任ある発掘調査を基本とした調査研究に取り組んでまいります。

次に、普及啓発事業につきましては、ホームページでの情報発信や調査遺跡における発掘調査説明会の開催、広報誌「埋文やまがた」の刊行などを通して、埋蔵文化財の調査研究の成果を県民の皆さまにお知らせしてまいりました。

特に今年度は、「夏休み親子発掘体験」や「ふるさと考古学入門」を開催し、考古学の面白さや古代人の知恵や工夫に触れる機会をもつことができました。また、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館・鶴岡市立図書館との共同展示や、村山総合支庁・山形空港ビル・庄内空港ビルでの「出前展示」を行い、県民の皆さんに出土品を公開し、当センターの事業への理解や文化財保護の重要性について広く普及を図ったところです。また、今年度は特に、身体障がい者、知的障がい者の方々が利用する施設である東根市の「東紅苑」において展示を行い、埋蔵文化財を身近に感じていただき好評を得たところです。

平成20年度から開催している「山形県埋蔵文化財センター参観デー」は、内容を充実しながら、企画展示、センターの業務内容の紹介、勾玉作り、整理作業などの考古学体験を実施したところ多くの来場者がありました。さらに、学校現場からの依頼を受けた「出前授業」は26校で実施したほか、職員を派遣しての講演や調査研究発表等を実施してまいりました。

今後も次世代を担う子供達を中心に、地域の伝統文化の大切さや、誇りと自信の持てる地域づくりの一環として、さまざまな機会を活用して、県民共有の文化遺産としての価値ある埋蔵文化財を後世に伝えていくため、職員一同、一層研鑽を重ねていく所存であります。

平成23年3月31日

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 相馬 周一郎



# 目 次

## I. 管理運営概要

|             |   |
|-------------|---|
| 1. 沿 革      | 1 |
| 2. 組 織      |   |
| (1) 役員及び評議員 | 1 |
| (2) 職制及び人員  | 2 |
| (3) 組 織     | 2 |
| (4) 職 員     | 3 |
| 3. 施 設      | 4 |

## II. 事業概要

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 1. 調査業務               | 5  |
| (1) 調査遺跡一覧            | 6  |
| (2) 調査遺跡の概要           |    |
| 高瀬山遺跡 (HO) 3期         | 8  |
| 鎌倉上遺跡                 | 12 |
| 馳上遺跡                  | 16 |
| 西谷地 b 遺跡              | 20 |
| 松橋遺跡                  | 24 |
| 田向遺跡                  | 28 |
| 田向 2 遺跡               | 29 |
| 経塚森遺跡                 | 30 |
| 清水遺跡 (1)              | 31 |
| 清水遺跡 (2)              | 35 |
| 東熊野苗畑遺跡               | 39 |
| 北原 2 遺跡               | 43 |
| 北原 4 遺跡               | 44 |
| 沼田 1 遺跡               | 45 |
| 沼田 2 遺跡               | 46 |
| 八合田遺跡                 | 48 |
| 森の原遺跡                 | 49 |
| 出張坂城跡                 | 50 |
| 作野遺跡                  | 51 |
| 2. 普及啓発等業務            |    |
| (1) 研修等               |    |
| ①全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣 | 55 |
| ②埋蔵文化財担当者専門研修への派遣     | 55 |
| (2) 情報処理              |    |
| 収蔵図書データベース            | 55 |

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| (3) 普及啓発                             |    |
| ① ホームページ                             | 56 |
| ② 山形県埋蔵文化財センター参観デー やまがた埋文祭り2010      | 56 |
| ③ 平成22年度発掘調査速報会                      | 56 |
| ④ 外部展示                               | 57 |
| ⑤ 学校への協力                             | 58 |
| ⑥ 来所者                                | 59 |
| ⑦ 職員派遣等                              | 61 |
| ⑧ 調査説明会                              | 61 |
| ⑨ 資料貸出                               | 62 |
| ⑩ 資料掲載許可                             | 62 |
| ⑪ 出版物                                | 62 |
| (4) 調査研究発表                           |    |
| 土器片が集中した理由                           |    |
| —村山市東熊野苗畑遺跡で発見された土器集中部から見える古代の生活の様子— |    |
| 大場正善・濱松優介                            | 63 |

# I 管理運営概要

## 1. 沿革

山形県には、土地に埋蔵された埋蔵文化財や史跡、有形文化財、民俗文化財などが数多く残されています。これらの文化財は、長い歴史の中で生まれ、育まれ、そして今日まで守り伝えられてきた貴重な県民の文化遺産であり、これを保護・活用し、次世代に確実に継承していくことが大事です。

平成16年に策定された第5次山形県教育振興計画では、「いのち」、「まなび」、「かかわり」の三つがキーワードとなっています。埋蔵文化財については、広い「かかわり」の中で、社会をつくるという基本方針のもと、「感性あふれる地域文化の創造」という視点から、保護と活用にあたることとされています。

平成5年4月に、埋蔵文化財の保護と県土の開発を両立させて調和を図るため、山形県の出資によって「財団法人山形県埋蔵文化財センター」が設立されました。当センターでは、埋蔵文化財の調査研究を通じて、県民の文化生活の向上と地域文化の振興に寄与することを目的として、

1. 県内遺跡等埋蔵文化財の調査研究
2. 埋蔵文化財の発掘調査
3. 埋蔵文化財の活用と保護思想の普及

の三つを基本とした各種事業を推進しております。

近年は埋蔵文化財の教育的価値を認識してもらう視点に立って、主に「発掘調査報告会」や「ホームページによる情報提供」、「出前授業」、「外部展示」などの普及啓発活動についても力を注いでおります。

## 2. 組織

### (1) 役員及び評議員

#### 役員

|      |       |                           |
|------|-------|---------------------------|
| 理事長  | 相馬周一郎 | 山形県教育委員会教育長（平成21年3月22日就任） |
| 専務理事 | 柏倉 俊夫 | 財団常勤役員                    |
| 理事   | 阿子島 功 | 福島大学 人間発達文化学類特任教授         |
| 理事   | 川崎 利夫 | 東北中世考古学会長                 |
| 理事   | 佐藤 鎮雄 | 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館長       |
| 理事   | 大沼 幸一 | 財団法人山形県生涯学習文化財団専務理事       |
| 監事   | 椰野 哲郎 | 税理士                       |
| 監事   | 渡辺 一夫 | 山形県教育庁総務課長                |

|     |       |                        |
|-----|-------|------------------------|
| 評議員 | 佐藤 禎宏 | 山形考古学会長                |
| 評議員 | 長澤 正機 | 最上地域史研究会理事             |
| 評議員 | 木村 俊夫 | 財団法人山形県生涯学習文化財団専務理事    |
| 評議員 | 鈴木 啓司 | 社団法人山形県私立学校総連合会常務理事    |
| 評議員 | 東海林廣幸 | 山形県農林水産部農村整備課農山村整備主幹   |
| 評議員 | 横屋 和興 | 山形県県土整備部道路課長           |
| 評議員 | 名和 達朗 | 山形県教育庁文化財保護推進課 文化財保護主幹 |



## (4) 職員

| 課名    | 職名      | 氏名    | 所屬     |
|-------|---------|-------|--------|
| 総務課   | 事務局長    | 小笠原正道 |        |
|       | 課長      | 鎌上 勝則 | 県行政職派遣 |
|       | 係長      | 高桑 弘美 | 財団職員   |
|       | 施設管理専門員 | 佐藤 恒  |        |
|       | 総務専門員   | 名和 洋子 |        |
|       | 事務員     | 井上 紀子 |        |
|       | 事務員     | 吉野 章子 |        |
| 企画情報室 | 主任調査研究員 | 加藤 郁恵 |        |
|       | 課長      | 佐々木 茂 | 県教育職派遣 |
| 整理課   | 課長補佐    | 安部 実  | 県行政職派遣 |
|       | 専門調査研究員 | 黒坂 雅人 | 財団職員   |
|       | 専門調査研究員 | 齊藤 主税 | 財団職員   |
|       | 主任調査研究員 | 小林 圭一 | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 福岡 和彦 | 県教育職派遣 |
|       | 調査員     | 小笠原伊之 | 県教育職派遣 |
|       | 調査員     | 須賀井明子 |        |
|       | 調査員     | 吉田 満  |        |
|       | 調査員     | 山田 渚  |        |
|       | 調査員     | 松田 聡子 |        |
| 調査課   | 課長      | 阿部 明彦 | 県行政職派遣 |
|       | 課長補佐    | 伊藤 邦弘 | 財団職員   |
|       | 専門調査研究員 | 須賀井新人 | 財団職員   |
|       | 専門調査研究員 | 佐竹 弘嗣 | 県教育職派遣 |
|       | 専門調査研究員 | 氏家 信行 | 財団職員   |
|       | 企画調整係長  | 原田 英明 | 財団職員   |
|       | 主任調査研究員 | 植松 暁彦 | 財団職員   |
|       | 主任調査研究員 | 高橋 敏  | 県教育職派遣 |
|       | 主任調査研究員 | 齋藤 健  | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 菅原 哲文 | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 三浦 勝美 | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 高桑 登  | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 今 正幸  | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 水戸部秀樹 | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 川崎 康永 | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 池田 透  | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 中里 秀樹 | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 戸田 敬  | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 庄司 昭一 | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 江波 大  | 県教育職派遣 |
|       | 調査研究員   | 大場 正善 | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 菊池 玄輝 | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 草野 潤平 | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 天本 昌希 | 財団職員   |
|       | 調査研究員   | 渡辺 和行 | 財団職員   |
|       | 調査員     | 伊藤 純子 |        |
|       | 調査員     | 山木 巧  |        |
| 調査員   | 高木 茜    |       |        |
| 調査員   | 渡部 裕司   |       |        |
| 調査員   | 五十嵐 萌   |       |        |
| 調査員   | 瀨田 純    |       |        |
| 調査員   | 後藤枝里子   |       |        |
| 調査員   | 安部 将平   |       |        |
| 調査員   | 山田めぐみ   |       |        |
| 調査員   | 佐藤 智幸   |       |        |
| 調査員   | 千田 一志   |       |        |
| 調査員   | 岩崎 恒平   |       |        |
| 調査員   | 濱松 優介   |       |        |
| 調査員   | 高柳 俊輔   |       |        |

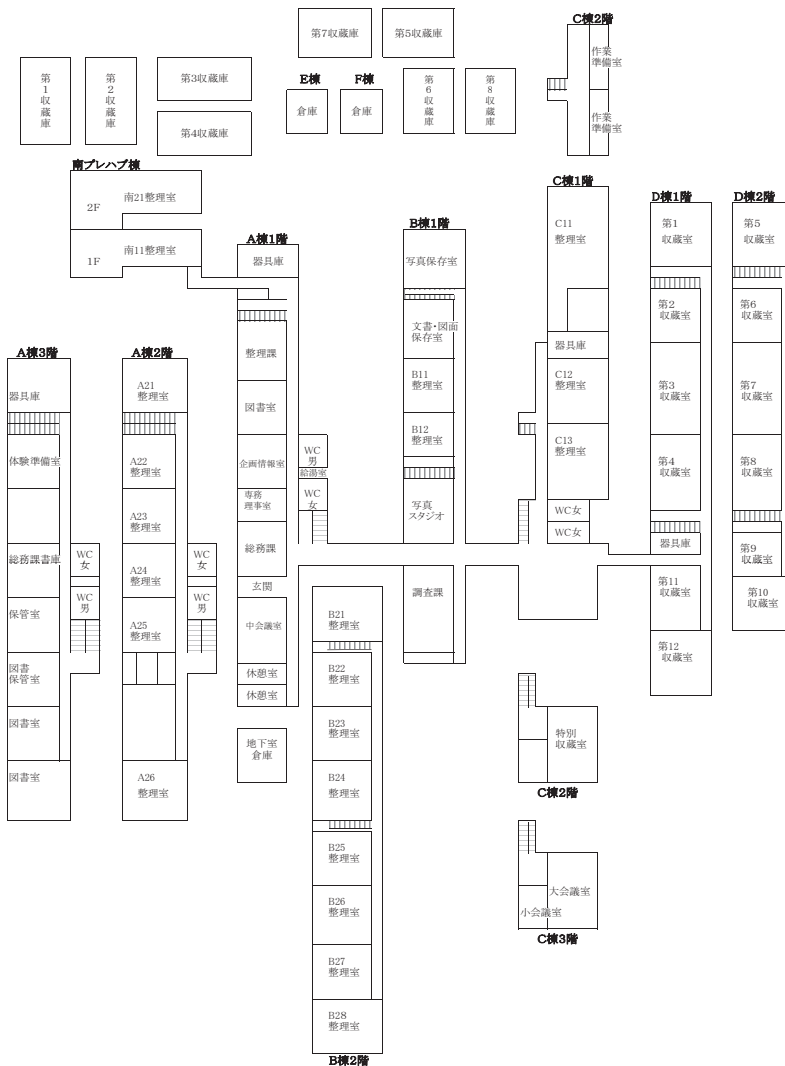


### 3. 施設

財団法人山形県埋蔵文化財センターは、山形県上市市弁天二丁目15番1号に所在する。

当所の施設は、A棟からF棟までの建物からなる。

- |       |   |             |                            |
|-------|---|-------------|----------------------------|
| A     | 棟 | 鉄筋コンクリート3階建 | 管理棟（専務理事室、総務課、企画情報室・整理課ほか） |
| B     | 棟 | 鉄骨2階建       | 整理棟（調査課・整理室ほか）             |
| C     | 棟 | 鉄筋コンクリート3階建 | 出土文化財収蔵棟                   |
|       |   | 鉄骨2階建、鉄骨1階建 | 整理棟                        |
| D     | 棟 | 鉄骨2階建       | 出土文化財収蔵棟                   |
| E・F   | 棟 | 鉄骨平屋建       | 器材棟（倉庫）                    |
| 南プレハブ | 棟 | 2階建         | 整理棟                        |
| プレハブ  | 棟 | 平屋建         | 出土文化財収蔵棟（第1～第8）8棟          |



## II 事業概要

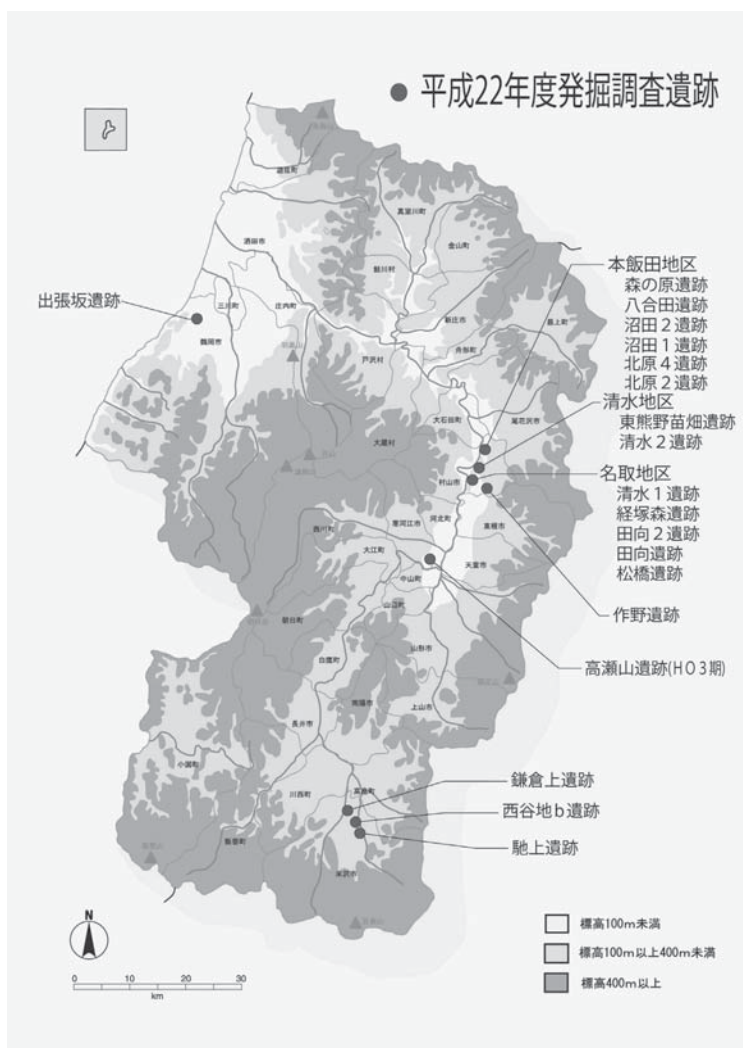
### 1. 調査業務

平成22年度は、国土交通省および山形県農林水産部、山形県土整備部並びに村山市から委託を受け、道路建設や公園整備事業などに先だっでの発掘調査と整理作業を実施しました。

発掘調査は19遺跡について行い、調査面積は67,065㎡になります。出土遺物は土器等186箱が出土文化財の認定を受けました。

報告書作成のための整理作業は26遺跡について実施し、そのうち3冊の発掘調査報告書を刊行しました。

- 1 森の原遺跡
- 2 八合田遺跡
- 3 沼田2遺跡
- 4 沼田1遺跡
- 5 北原4遺跡
- 6 北原2遺跡
- 7 東熊野苗畑遺跡
- 8 清水2遺跡
- 9 清水1遺跡
- 10 経塚森遺跡
- 11 田向2遺跡
- 12 田向遺跡
- 13 松橋遺跡
- 14 作野遺跡
- 15 高瀬山遺跡 (HO3期)
- 16 鎌倉上遺跡
- 17 西谷地b遺跡
- 18 馳上遺跡
- 19 出張坂城跡



※本書中の「調査遺跡の概要」の記述内容は概要の報告であり、発掘調査報告書の刊行をもって本報告となります。

## (1) 調査遺跡一覧

| NO. | 遺跡名           | 所在地  | 主な時代     | 遺跡の種類 | 調査期間         |
|-----|---------------|------|----------|-------|--------------|
| 1   | 高瀬山遺跡(HO)3期3次 | 寒河江市 | 縄文・奈良～中世 | 集落跡   | 6月1日～8月18日   |
| 2   | 鎌倉上遺跡2次       | 米沢市  | 古墳       | 集落跡   | 6月1日～10月15日  |
| 3   | 堤屋敷遺跡2次       | 米沢市  | 縄文・平安～近世 | 集落跡   |              |
| 4   | 下屋敷遺跡         | 米沢市  | 縄文・中世    | 集落跡   |              |
| 5   | 馳上遺跡2・3次      | 米沢市  | 古墳～中世    | 集落跡   | 5月14日～11月30日 |
| 6   | 西谷地b遺跡(2次)    | 米沢市  | 奈良・平安    | 集落跡   | 5月13日～11月30日 |
| 7   | 松橋遺跡          | 村山市  | 奈良・平安    | 集落跡   | 5月17日～9月22日  |
| 8   | 田向遺跡          | 村山市  | 奈良・平安    | 集落跡   | 5月17日～11月30日 |
| 9   | 田向2遺跡         | 村山市  | 奈良・平安    | 集落跡   | 5月17日～8月27日  |
| 10  | 経塚森遺跡         | 村山市  | 平安       | 集落跡   | 5月17日～11月30日 |
| 11  | 清水遺跡(1)       | 村山市  | 縄文・平安    | 集落跡   | 5月17日～11月30日 |
| 12  | 清水遺跡(2)       | 村山市  | 縄文・平安    | 集落跡   | 5月18日～11月30日 |
| 13  | 東熊野苗畑遺跡       | 村山市  | 縄文       | 集落跡   | 5月18日～11月30日 |
| 14  | 北原2遺跡         | 村山市  | 縄文・平安    | 集落跡   | 5月19日～10月6日  |
| 15  | 北原4遺跡         | 村山市  | 縄文・平安    | 集落跡   | 5月19日～10月29日 |
| 16  | 沼田1遺跡         | 村山市  | 縄文・平安    | 集落跡   | 5月19日～7月7日   |
| 17  | 沼田2遺跡         | 村山市  | 縄文・平安    | 集落跡   | 5月19日～11月26日 |
| 18  | 八合田遺跡         | 村山市  | 縄文       | 集落跡   | 9月8日～11月26日  |
| 19  | 森の原遺跡         | 村山市  | 縄文・平安    | 集落跡   | 10月4日～11月30日 |
| 20  | 川前2遺跡1・2次     | 中山町  | 古墳～平安    | 集落跡   |              |
| 21  | 川前2遺跡3・4次     | 山形市  | 古墳～平安    | 集落跡   |              |
| 22  | 行司免遺跡         | 鶴岡市  | 奈良・平安    | 集落跡   |              |
| 23  | 矢馳A遺跡2-4次     | 鶴岡市  | 古墳～中世    | 集落跡   |              |
| 24  | 川内袋遺跡         | 鶴岡市  | 縄文       | 集落跡   |              |
| 25  | 玉作2遺跡2次       | 鶴岡市  | 古墳・平安    | 集落跡   |              |
| 26  | 出張坂城跡         | 鶴岡市  | 中世・近世    | 城館跡   | 11月1日～11月30日 |
| 27  | 作野遺跡3次        | 村山市  | 縄文       | 集落跡   | 7月5日～8月4日    |
| 28  | 作野遺跡2次        | 村山市  | 縄文       | 集落跡   |              |

計

| 調査面積<br>：平方m | 文化財認<br>定数：箱 | 調査の原因〈委託者〉                  | 業務内容 |    |     | 調査経費<br>：千円 |
|--------------|--------------|-----------------------------|------|----|-----|-------------|
|              |              |                             | 発掘   | 整理 | 報告書 |             |
| 1,500        | 16           | 最上川ふるさと総合公園整備事業<山形県県土整備部>   | ○    | ○  | —   | 14,982      |
| 3,500        | 36           | 一般国道287号(米沢市窪田)<山形県県土整備部>   | ○    | ○  | —   | 46,263      |
|              |              | 東北中央自動車道(福島~米沢)建設<国土交通省>    | —    | ○  | —   | 7,860       |
|              |              | 東北中央自動車道(福島~米沢)建設<国土交通省>    | —    | ○  | —   |             |
| 8,800        | 42           | 東北中央自動車道(米沢~米沢北)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 240,369     |
| 12,240       | 85           | 東北中央自動車道(米沢~米沢北)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   |             |
| 4,200        | 6            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 168,987     |
| 4,500        | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   |             |
| 2,500        | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 137,382     |
| 3,120        | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   |             |
| 6,800        | 41           | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 133,539     |
| 5,900        | 33           | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   |             |
| 2,900        | 15           | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 31,887      |
| 700          | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   |             |
| 3,300        | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 11,434      |
| 1,200        | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   |             |
| 3,700        | 5            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 6,039       |
| 600          | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   |             |
| 755          | 1            | 東北中央自動車道(東根~尾花沢)建設<国土交通省>   | ○    | ○  | —   | 1,857       |
|              |              | 須川河川改修事業(下流部)<国土交通省>        | —    | —  | ○   |             |
|              |              | 須川河川改修事業(下流部)<国土交通省>        | —    | ○  | —   | 7,869       |
|              |              | 日本海沿岸東北自動車道(温海~鶴岡)建設<国土交通省> | —    | ○  | —   |             |
|              |              | 日本海沿岸東北自動車道(温海~鶴岡)建設<国土交通省> | —    | ○  | —   | 29,028      |
|              |              | 日本海沿岸東北自動車道(温海~鶴岡)建設<国土交通省> | —    | ○  | —   |             |
|              |              | 日本海沿岸東北自動車道(温海~鶴岡)建設<国土交通省> | —    | ○  | ○   | 39,246      |
|              |              | 日本海沿岸東北自動車道(温海~鶴岡)建設<国土交通省> | —    | ○  | ○   |             |
| 600          | 0            | 日本海沿岸東北自動車道(温海~鶴岡)建設<国土交通省> | ○    | ○  | —   | 6,039       |
| 250          | 60           | 徳内・シーボルトライン道路改良事業(村山市)      | ○    | ○  | —   |             |
|              |              | 徳内・シーボルトライン道路改良事業(村山市)      | —    | ○  | ○   | 11,434      |
|              |              | 徳内・シーボルトライン道路改良事業(村山市)      | —    | ○  | ○   |             |
| 67,065       | 186          |                             |      |    |     | 876,742     |

## (2) 調査遺跡の概要

# たかせやま 高瀬山遺跡 (H O) 3期

|       |                                  |
|-------|----------------------------------|
| 遺跡番号  | 430                              |
| 調査回数  | 第3次                              |
| 所在地   | 寒河江市大字寒河江字高瀬山                    |
| 北緯・東経 | 38度21分44秒・140度16分8秒              |
| 調査委託者 | 山形県村山総合支庁建設部西村山道路計画課             |
| 起因事業  | 最上川ふるさと総合公園整備事業                  |
| 調査面積  | 1,500㎡                           |
| 現地調査  | 平成22年6月1日～8月18日                  |
| 調査担当者 | 今正幸（現場責任者）・安部将平                  |
| 調査協力  | 寒河江市教育委員会・村山教育事務所                |
| 遺跡種別  | 集落跡・古墳                           |
| 時代    | 旧石器時代・縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代 中世     |
| 遺構    | 土坑・ピット・溝跡・石器集中出土地点               |
| 遺物    | 縄文土器・土師器・須恵器・石器・石製品（文化財認定箱数：16箱） |



遺跡位置図 (S=1:50,000)

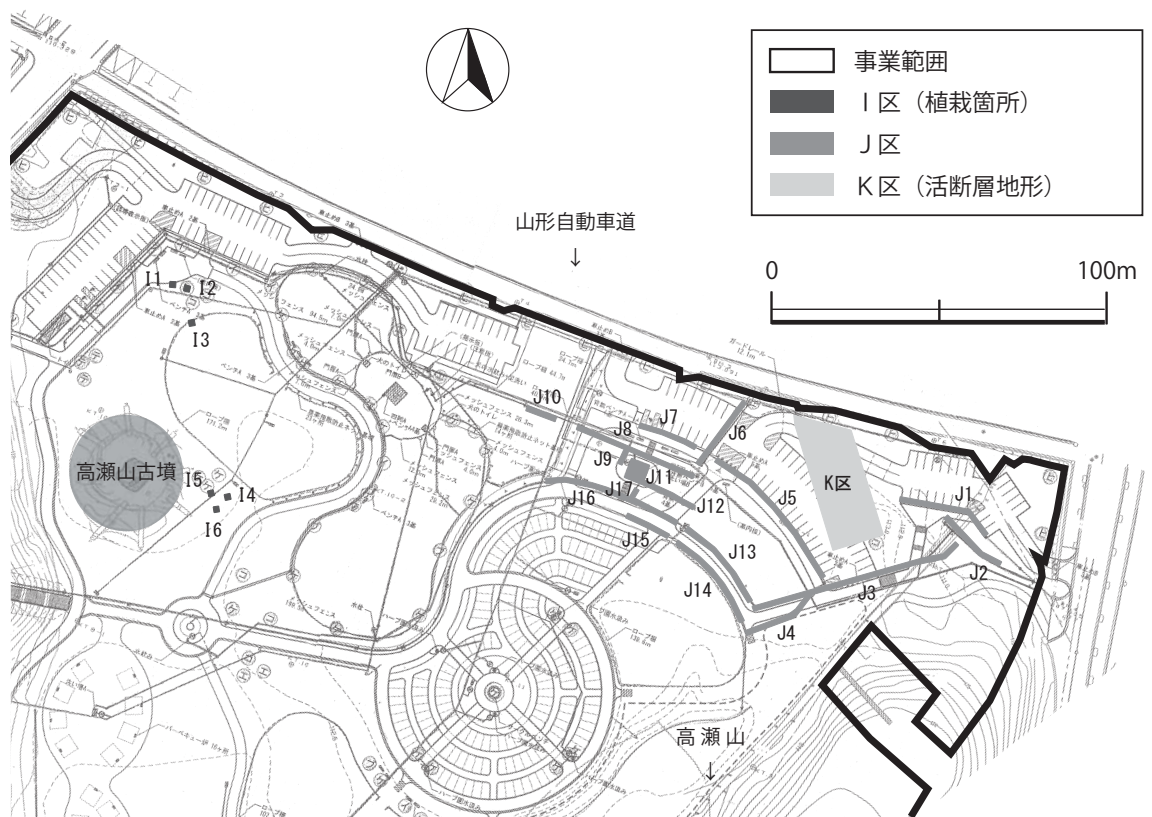
### 調査の概要

高瀬山遺跡は寒河江市街の南西、最上川の北岸に沿った東西約1.6kmの範囲に位置する。旧石器時代から中世にわたる複合遺跡で、県内有数の規模を誇っている。周辺は果樹園や畑地として利用されてきたが、近年の開発によって現況は大きく変貌しつつある。当センターでは高速道路建設に係る1期・2期・SA（サービスエリ

A地区）、公園造成に係るHO（旧称ハイウェイ・オアシス地区）1期・2期の発掘調査を実施してきた。

今回は最上川ふるさと総合公園整備事業に係る高瀬山遺跡（HO）3期の発掘調査である。調査区は遺跡の南東端にあたる比高差20～30mほどの小丘陵「高瀬山」の西麓、最上川との間の中位段丘に立地する。調査区域には、県指定史跡「高瀬山古墳」が隣接している。調査は給排水・電気・フェンスなど公園設備の埋設工事に沿った幅1～2mの線掘り（トレンチ）が中心で、住居跡や溝跡などの大型遺構、或いは、遺跡の全容を捉えることは困難であった。20・21年度に実施した第1・2次調査では、縄文時代中期末葉～後期前葉を主体とする大規模な集落跡をはじめ、奈良・平安時代の竪穴住居跡や古墳の周溝しゅうこうの可能性のある溝跡などが検出されている。

22年度の第3次調査の調査面積は1,500㎡で、調査区は高瀬山古墳の周辺（I区）と高瀬山の北西麓（J・K区）に分かれる。植栽箇所のI区（I1～6地点）では2×2mの坪掘り、J区（J1～10・12～17トレンチ J11地点）は主に工事ラインに沿った線掘りを



調査区概要図 (S=1:2,000)

行った。なお、K区では公園予定地内に残存する活断層地形の確認と保存・活用を目的とする約600㎡の面調査を併せて実施している。

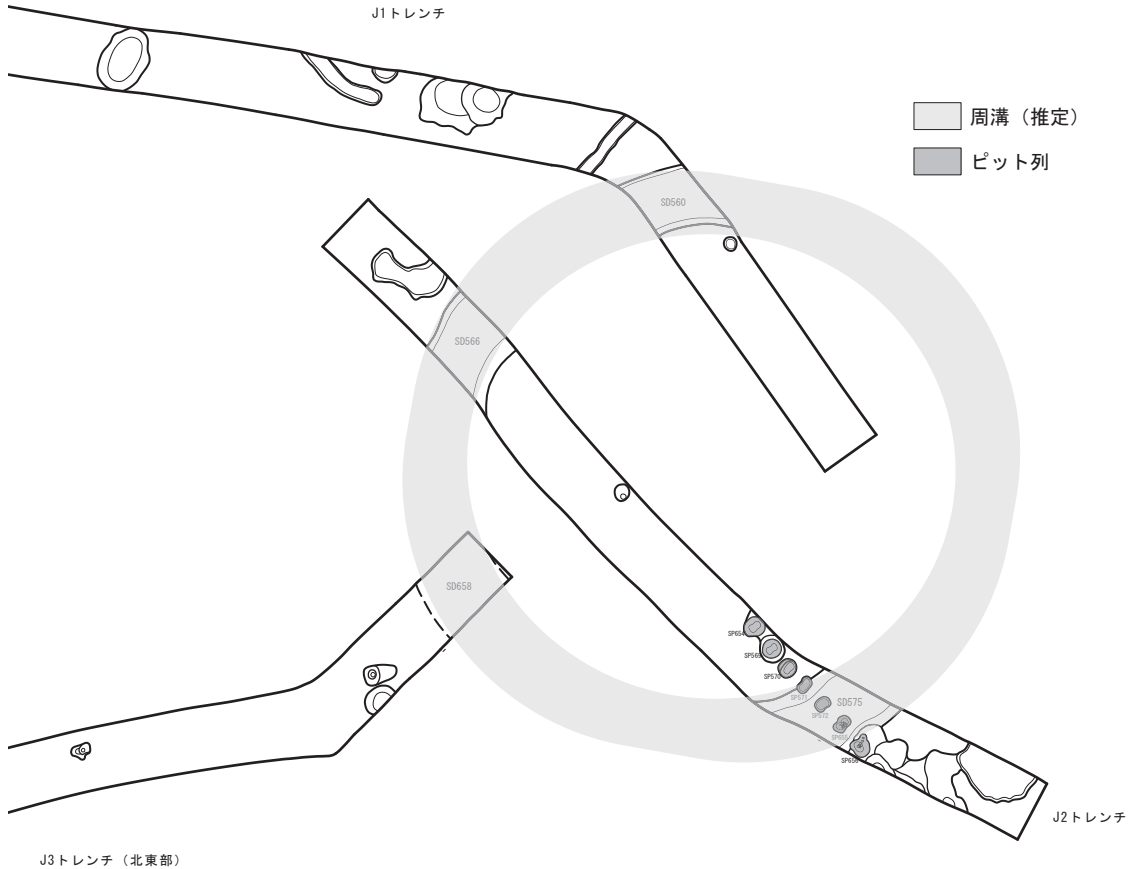
### 遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は登録数195基で、主な遺構として土坑・ピット・溝跡・石器集中出土地点などがある。

I区は調査箇所が局所的だったこともあり、遺構や遺物はほとんど検出されなかった。

J1～3トレンチでは、古墳時代の円墳或いは方形周溝墓の周溝の一部とみられる溝跡(S D 560・566・575・658)を4箇所検出した。溝跡は幅1.4～2m・深さ0.2～0.5mを測り、周溝の平面プランは外径14mほどの円形或いは隅丸方形を呈するものと推定される。さらにJ2トレンチでは、この溝跡を切るピット列(S P 569～572・654～656)が検出された。ピットの底面は楕円形を呈し、根石ねいしと思われる複数の小礫を敷いた痕跡が残ることから、2本組の柱穴である可能性

が示唆される。館跡や経塚といった中世の遺跡が存在する高瀬山の直下に位置し、これらに関連する区画施設とも考えられる。いずれも検出は一部分に限られ、遺構の性格を示すような遺物の出土も見られなかったが、近接する高速道路(1期調査区)においても同様の遺構が検出されており、当該期に属するものと判断される。段丘上端にあるJ5トレンチでは、欠損した石棒せきぼうと石核を伴出する土坑(S X 527)が検出されている。土坑の規模や形状からは、縄文時代の陥穴おとしあなが想起される。J15トレンチでは1.5×3.5mのテストピットの範囲において、1200点を超える多量の石器群(剥片・碎片)が出土した。現在、整理段階における石器の組成にはナイフ形石器6点・彫刻刀形石器8点・彫刻刀スポール33点・細石刃さいせきじん66点・石刃せきじん99点・石刃核8点・ハンマーストーン2点が含まれ、数個体の接合資料も確認されている。遺物分布や石器組成からみて、旧石器時代の石器製作・廃棄の場であったと考えられる。なお、原石けつがんの頁岩は、付近の最上川河床で採取されたものと思われる。出土層



J 1・2・3 トレンチ (周溝・ピット列) 遺構配置図 (S=1:160)

位は縄文時代以降の遺物包含層（黒ボク土）よりも下層の地山（褐色ローム質土）直上から約 30～40cm までの深さで、地質学的な分析によれば約 1～2 万年前の年代が想定される。

北東の段丘斜面に立地する K 区は、調査面積に比して遺構の分布は非常に希薄で、検出遺構はやや大型の土坑 3 基（S K 710～712）のみである。また、活断層地形に関わって、調査区を横断する断層崖（地山の落ち込み）を帯状に検出した。逆断層によって生じた高低差は 1～1.2 m を測る。土層断面から、新たに断層面の切れ目が黒ボク土層まで達している状況が確認できた。なお、断層崖に厚く堆積する黒ボク土の中～下層において、縄文時代の石器（石匙・石筥）が出土している。

出土遺物は整理箱 16 箱で、主な遺物として縄文土器・土師器・須恵器・石器・石製品などがある。土器はいず

れも小破片で、器形が窺えるような資料はほとんどなかった。縄文時代の石器・石製品には、石鏃・石匙・石筥・石核・磨石・石棒がある。

### まとめ

今回の調査成果として、遺構や遺物は少なかったものの、これまでの第 1・2 次調査では見られなかった旧石器時代や中世に属する遺構や遺物を新たに検出した。特に旧石器時代の石器製作址は、大変貴重な発見となった。J 区で検出された溝跡やピット列、旧石器の集中ブロックなどは、高瀬山遺跡（1 期）との関連性が高く、北方面への遺跡の広まりが予測される。

高瀬山遺跡（H O）3 期の発掘調査は 22 年度で終了し、23 年度は第 1～3 次までの整理事業を行って、報告書を刊行する予定である。



S X 527 石棒出土状況



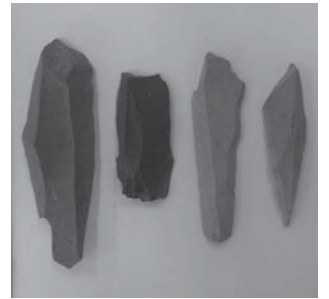
J 15 トレンチ 旧石器集中出土地点



J・K区全景 (写真上：北)



ナイフ形石器



彫刻刀形石器



K区 断層崖・遺構検出状況 (北から)



断層面 (切れ目) の土層断面



# 鎌倉上遺跡

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | 平成20年度登録                                |
| 調査回数  | 第2次                                     |
| 所在地   | 米沢市窪田町小瀬字鎌倉上                            |
| 北緯・東経 | 北緯37度57分6秒 東経140度6分43秒                  |
| 調査委託者 | 山形県置賜総合支庁建設部道路計画課                       |
| 起因事業  | 一般国道287号 米沢北バイパス道路改築事業(交付金・国道)に伴う緊急発掘調査 |
| 調査面積  | 3,500㎡                                  |
| 現地調査  | 平成22年6月1日～10月15日                        |
| 調査担当者 | 菅原哲文(現場責任者)・山木巧                         |
| 調査協力  | 米沢市教育委員会・窪田コミュニティセンター・置賜教育事務所           |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 古墳時代                                    |
| 遺構    | 竪穴住居跡・河川跡・溝跡・畝跡・土坑・柱穴                   |
| 遺物    | 土師器・須恵器・陶磁器・木製品・石製品 (文化財認定箱数:36箱)       |



遺跡位置図(1:50,000)

## 調査の概要

鎌倉上遺跡は、米沢南陽道路の米沢北インターチェンジから西方約350mに所在する。遺跡は、鬼面川と最上川の2つの河川にはさまれた低地に立地する古墳時代の集落跡である。遺跡から北側約1kmには、前方後方墳の寶領塚古墳が位置している。

発掘調査は、国道287号米沢北バイパス建設に伴う緊急発掘調査として実施された。遺跡は、平成20年度に山形県教育委員会が行った試掘調査で確認され、新規

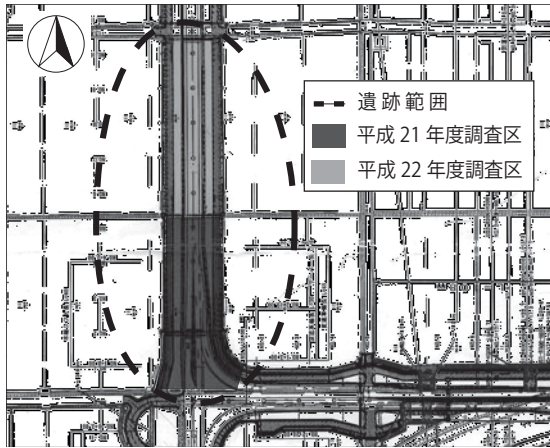
登録された。その結果、事業区に係る遺跡範囲の約7,000㎡について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが山形県から委託を受け、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、工事計画との調整から2カ年に亘り行われた。22年度の調査は、第1次調査区北側の約3500㎡を対象とし、6月初旬から10月中旬にかけて行った。

## 検出遺構と出土遺物

調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡10棟をはじめ、土坑、溝跡、河川跡、畑の畝跡が確認された。

竪穴住居跡は、いずれも平面形が方形で、一辺の長さが約3.5～6mを測る。ST105住居跡は、火災で焼失した住居跡と考えられ、住居の柱材や屋根材が炭化した状態で認められた。ST102・103住居跡でも、柱材や構築材の一部が出土している。これらの住居跡には、食物を煮炊きするためのカマドが備えられている。ST102住居跡は、煙道が伴うカマドが良好に残っており、調理具として使った甕などが一括して認められる。カマドの脇や住居内に備えられた貯蔵穴からは、土師器の壺が完全な形で出土している。これらの出土した遺物の特徴やカマドの存在から古墳時代後期の住居跡と推定される。



調査区概要図 (1:4000)

SK133 土坑<sup>どこう</sup>では、木製容器<sup>もくせいようき</sup>や板材、土師器<sup>どしき</sup>碗、栗の<sup>こしき</sup>実が出土しており、貯蔵<sup>たくわん</sup>穴の性格が推定される。調査区中央では、東西方向に延びる河川<sup>がわん</sup>跡が検出された。幅約10m、深さは約1.5mで、泥炭<sup>でいたん</sup>が厚く堆積する。集落の<sup>あき</sup>廃絶後に堆積が進み、埋没<sup>まいぼく</sup>したと推定される。

出土<sup>でい</sup>遺物<sup>いぶつ</sup>は、土師器<sup>どしき</sup>、須恵器<sup>すえき</sup>、木製品<sup>もくせいひん</sup>、石製品<sup>せきせいひん</sup>などがある。主に<sup>おもに</sup>竪穴<sup>たてあな</sup>住居<sup>じゅうきょ</sup>跡<sup>あと</sup>やその<sup>まわり</sup>周辺<sup>しゅうへん</sup>から多く出土<sup>でい</sup>している。土師器<sup>どしき</sup>の器種<sup>きしゅ</sup>は、煮炊<sup>にたき</sup>き用の<sup>かめ</sup>甕<sup>かめ</sup>、米<sup>こしき</sup>を蒸<sup>こ</sup>すための<sup>かま</sup>甗<sup>かま</sup>、貯蔵<sup>たくわん</sup>用の<sup>かめ</sup>壺<sup>かめ</sup>、食物<sup>じき</sup>を盛り付け<sup>たかづ</sup>ける<sup>かま</sup>坏<sup>かま</sup>、高い台<sup>たか</sup>が付<sup>つ</sup>く高坏<sup>たかづ</sup>が認め<sup>たが</sup>られる。出土<sup>でい</sup>量は少ないが、<sup>かま</sup>蒸<sup>こ</sup>で焼<sup>や</sup>かれた須恵器<sup>すえき</sup>も出土<sup>でい</sup>している。器種<sup>きしゅ</sup>は坏<sup>かま</sup>が中心<sup>ちゅうしん</sup>で、他地域<sup>たかち</sup>で生産<sup>せい</sup>されたものが流通<sup>りゅう</sup>したと考え<sup>かんが</sup>られる。木製品<sup>もくせいひん</sup>は、装飾<sup>さうじ</sup>を施<sup>し</sup>した大型<sup>たい</sup>の容器<sup>ようき</sup>などが確認<sup>かくにん</sup>された。捨て場<sup>すて</sup>からは、竹櫛<sup>たけぐし</sup>状<sup>じょう</sup>の材料<sup>ざいりょう</sup>を結<sup>むす</sup>んで黒漆<sup>くろしつ</sup>を塗<sup>ぬ</sup>った結齒<sup>むす</sup>式<sup>しき</sup>竪櫛<sup>たけぐし</sup>が出土<sup>でい</sup>しており、集落<sup>じゅうらく</sup>跡<sup>あと</sup>からの出土<sup>でい</sup>は珍しい<sup>めづ</sup>しいといえる。石製品<sup>せきせいひん</sup>では、2点<sup>に</sup>の石製<sup>せきせい</sup>模造品<sup>もぞうひん</sup>が出土<sup>でい</sup>した。勾玉<sup>かぎ</sup>形<sup>がた</sup>をしたものは、集落<sup>じゅうらく</sup>の祭祀<sup>さいし</sup>に用<sup>もち</sup>いられたものと推測<sup>すいさく</sup>される。住居<sup>じゅうきょ</sup>内<sup>うち</sup>からは、糸<sup>いと</sup>を紡<sup>つむ</sup>ぐために用<sup>もち</sup>いた紡錘<sup>ぼうすい</sup>車<sup>くるま</sup>の一部<sup>いちぶ</sup>も出土<sup>でい</sup>している。

### まとめ

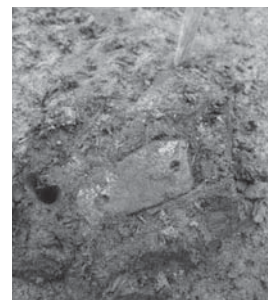
今回の調査では、第1次調査で確認された古墳時代前期以外に、古墳時代後期を中心とした集落跡の存在が明らかになった。東西に延びる河川跡を境として、南側に古墳時代前期、北側には古墳時代後期の集落が分布する様相が認められる。また、住居の建築部材が良好に残されていた焼失住居が確認された。遺物では、土師器をはじめとする多様な遺物が多く出土した。特に住居内からまとまって確認された遺物は、古墳時代の日常生活を具体的に復元できる良好な資料といえる。



調査区全景 (北から)



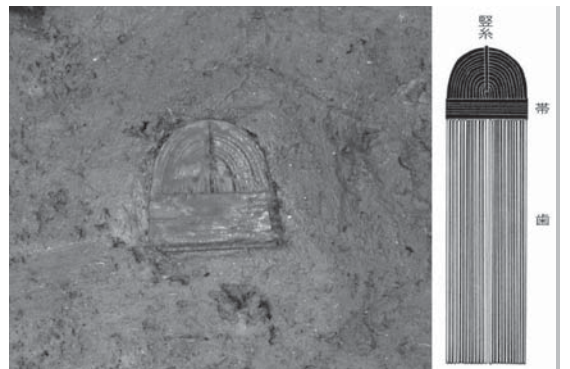
調査区作業状況 (西から)



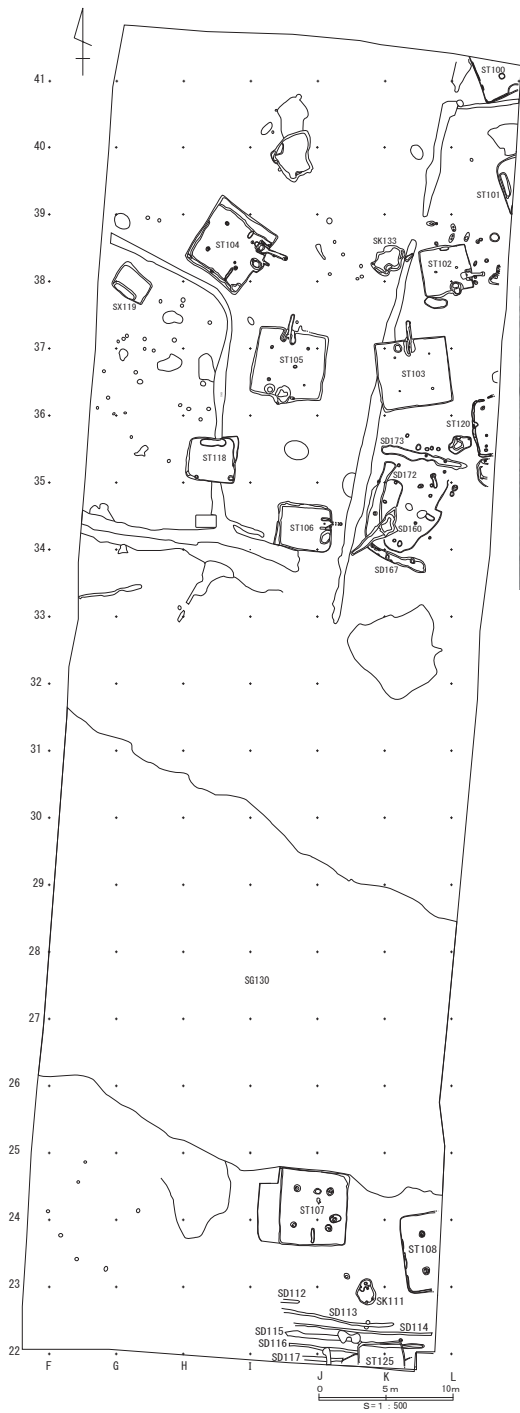
石製模造品の出土状況



捨て場出土の勾玉形石製品



竪櫛の出土状況



鎌倉上遺跡第2次発掘調査区遺構配置図



S T 102 住居跡完掘状況 (東から)



S T 102 住居跡内土坑の遺物出土



S T 102 住居跡カマド完掘状況



S T 104 住居跡遺物出土状況 (西から)



S T 107・108 住居跡完掘状況 (西から)



S T 103 住居跡床面検出状況 (北から)



S T 103 住居跡カマド遺物出土 (南から)



S T 105 住居跡遺物出土状況 (南から)



S T 105 住居跡南東隅遺物出土 (東から)



S T 106 住居跡遺物出土 (東から)



S T 106 住居跡内遺物出土



S K 133 土坑内遺物出土状況



調査区東側の溝状遺構 (北から)



竪穴住居跡から出土した遺物

# はせがみ 馳上遺跡

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | 米沢市遺跡番号 353-354                         |
| 調査回数  | 第3次                                     |
| 所在地   | 米沢市大字川井字元立                              |
| 北緯・東経 | 北緯 37 度 55 分 05 秒・東経 140 度 08 分 20 秒    |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                   |
| 起回事業  | 東北中央自動車道（米沢～米沢北）改築事業                    |
| 調査面積  | 8,800㎡                                  |
| 現地調査  | 平成22年5月14日～11月30日                       |
| 調査担当者 | 須賀井新人（現場責任者）・菊池玄輝・五十嵐萌・岩崎恒平・山木巧         |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・米沢市教育委員会・置賜教育事務所 |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 古墳時代・奈良時代・平安時代・中世                       |
| 遺構    | 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・河川跡・溝跡・土坑・柱穴・炉跡            |
| 遺物    | 土師器・須恵器・黒色土器（文化財認定箱数：42箱）               |



遺跡位置図（1：50,000）

## 調査の概要

馳上遺跡は米沢市役所の東方約1kmに位置し、古墳時代と奈良・平安時代の集落跡と推測される遺跡である。西側を流れる羽黒川によって形成された後背湿地上に立地し、現在の地目は水田となっている。馳上遺跡では、平成12年度に県道改良工事に係る大規模な発掘調査（第1次調査）が行われた。また昨年度（平成21年度）には、高速道路建設に伴う第2次の発掘調査を、遺跡範囲の西域に当たる11,750㎡を対象として実施した。

今回の調査（第3次調査）は、第2次調査に継続する

もので、遺跡範囲西側の南北両端域に係る約8,800㎡を対象とした。

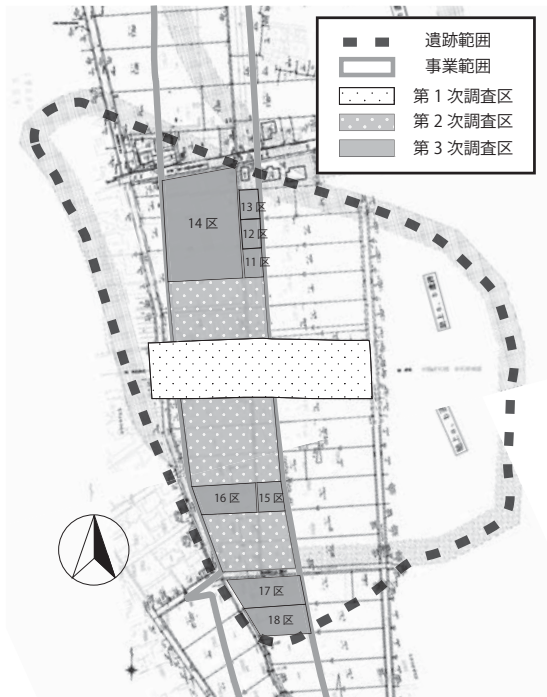
調査区は既設・仮設の排水路により大小8区画（11～18区）に分割され、北側の14区は工事用道路との関連から、東西に二分して調査を行なった。調査区内における地盤の高さはほぼ一定ながら、遺構や遺物の分布は14区と16区に多く認められる。

## 遺構

今回の調査で見つかった遺構には、住まいや倉庫であった竪穴住居跡や掘立柱建物跡、廃棄物用の穴と考えられる大小の土坑、区画や排水に使われた溝跡などがある。また、羽黒川の支流であったと思われる河川跡が複数見つかると、住居跡などの遺構はこれら河川間の比較的安定した場所に築かれている。

竪穴住居跡は30棟あまり確認され、一定の区域に重複したものも存在する状況から、集落の変遷過程を探ることができる。大きさは方形の一辺が3～5mの規模のものが一般的だが、14区では一辺の長さが9mにも及ぶ大型の住居跡が1棟確認された。

掘立柱建物跡は、規模の大きな柱穴からなる3棟が見つかった。これらは東西二間×南北三間の配列で、柱間の距離は九尺（約2.7m）を、また柱穴掘り方は径・



調査区概要図 (1 : 5,000)

深さも約 1 m の大きさを測るものである。

幅が 12 ~ 15 m 程の河川跡は、大きく蛇行しながら遺跡内を南から北へ流れている。川底までは約 1.5 m の深さがあり、土層は砂と粘土が交互に堆積していた。粘土層は腐食により黒ずんでおり、この時期には水の流が緩やかな湿地になっていたと思われる。遺物はこの粘土層から多く出土し、特に蛇行する部分からは土器の完成品も見つかっている。

### 遺物

遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器・黒色土器等が、主に河川跡や住居跡から多く出土している。遺物の総数は整理箱にして 42 箱である。

土器はほとんどが破片だが、復元して完形になるものもあり、煮炊き用の土師器の甕、貯蔵用の須恵器の甕・壺、食器である須恵器や黒色土器の坏などが認められる。坏には、底部が大きく器高が低い形状の奈良時代のものと、底部が比較的小さく器高が増す平安時代のものがあり、その形態の違いからおよそ一世紀の時期幅があるものと考えられる。河川跡出土の坏類の中には、底部に墨書されたものが認められた。遺構内における遺物の分布傾向は、微高地状を呈した遺跡北部検出の竪穴住居跡群に集中している。



14 区 ST5665 竪穴住居跡 調査状況



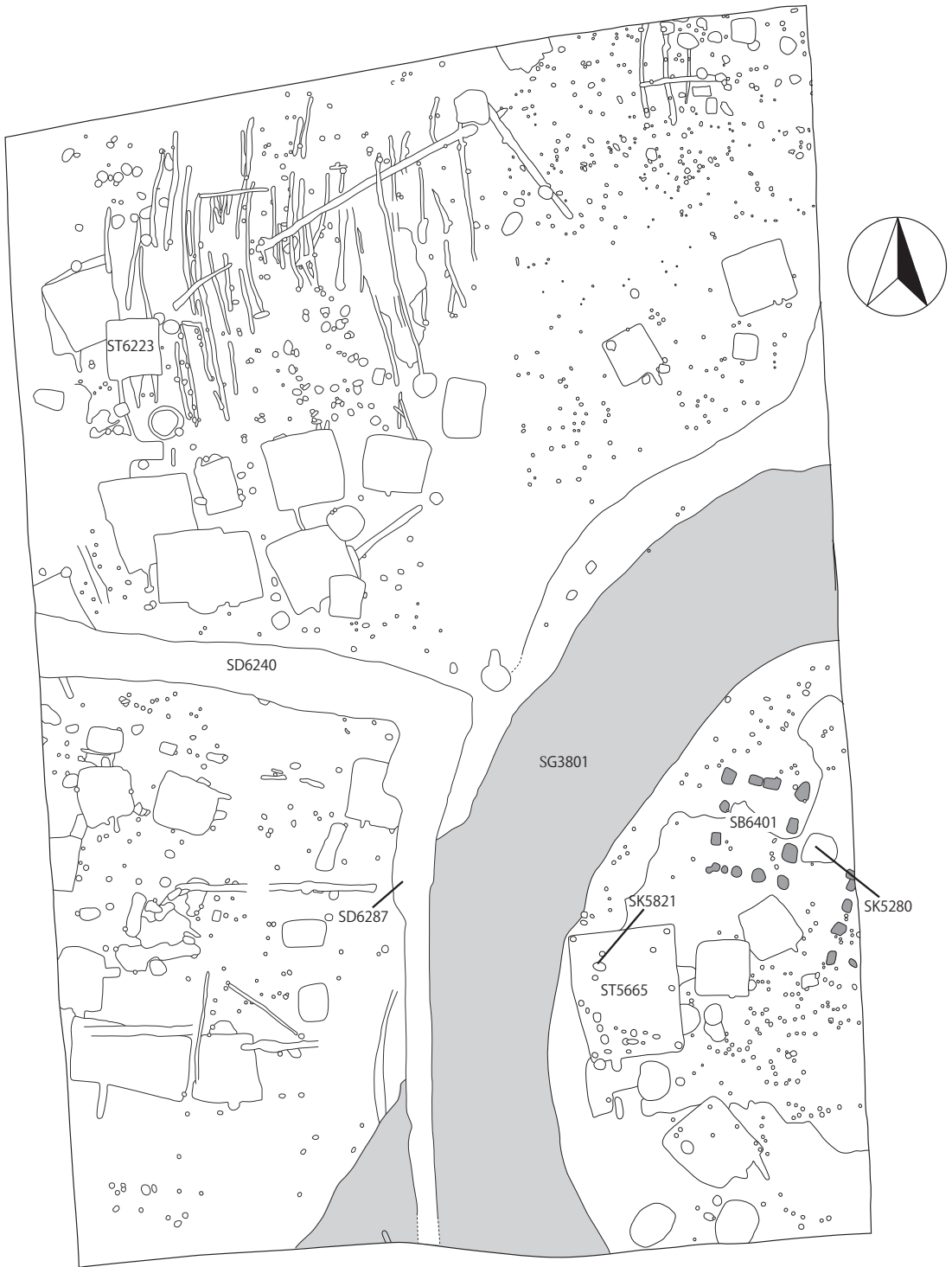
16 区全景 完掘状況

### まとめ

馳上遺跡は、羽黒川右岸の後背湿地上に営まれた奈良・平安時代を中心とした集落跡である。第 1 次・第 2 次調査の内容も加えて、これまでの調査成果をまとめると以下ようになる。

今回発見された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡や土抗、中世の溝跡である。調査区における遺構の分布状況から、集落跡の中心部は遺跡範囲の西側であることが分かった。出土した遺物は、奈良・平安時代の土器が主体で、その多くが住居跡や河川跡から出土している。

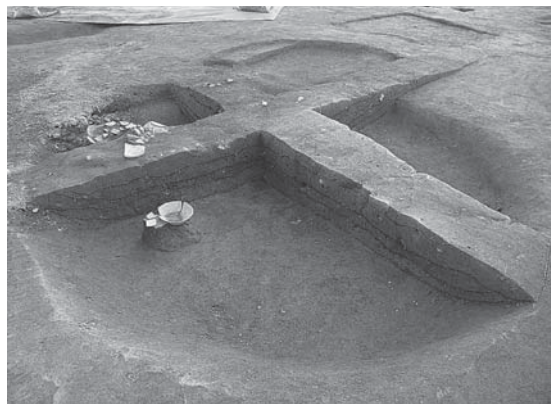
河川は流路を幾度か変えながら北流するが、集落もその変化に応じて中心を移したことが窺われる。また、河川沿いに検出された大型の建物跡は当時の倉庫と思われる。舟運を利用した物資の集積場所であった可能性がある。過年度の調査では、硯や木簡、水瓶といった郡や郷の役所と関連した遺物も出土しており、一般的な農耕集落とは異なる様相が窺われる。



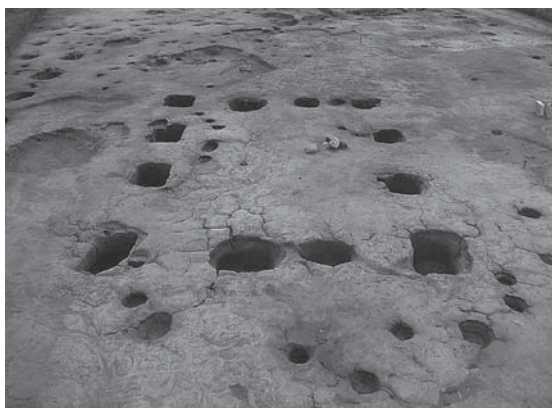
第 14 区遺構配置図



14区 ST5665 竪穴住居跡 完掘状況



14区 SK5280 土坑 土層断面



14区 SB6401 掘立柱建物跡 完掘状況



14区 ST6223 竪穴住居跡 炭化材出土状況



14区 ST5665 カマド周辺 遺物出土状況



12区 SP5373 柱穴 土層断面



12区 SK5363 土坑 須恵器壺出土状況



14区 SK5821 土坑 遺物出土状況



16区 SK6190 土坑 土師器甕出土状況



# にしやち 西谷地b遺跡

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | A 352 (米沢市遺跡番号)                         |
| 所在地   | 米沢市大字川井字道下                              |
| 調査回数  | 第2次                                     |
| 北緯・東経 | 37度55分27秒・140度8分7秒                      |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                   |
| 調査原因  | 東北中央自動車道(米沢～米沢北間)改築事業                   |
| 調査面積  | 12,240㎡                                 |
| 現地調査  | 平成22年5月13日～11月30日                       |
| 調査担当者 | 水戸部秀樹(現場責任者)・今正幸・草野潤平・高木茜・濱田純・高柳俊輔      |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・米沢市教育委員会・置賜教育事務所 |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 古墳時代・奈良時代・平安時代・中世                       |
| 遺構    | 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・河川跡                  |
| 遺物    | 土師器・須恵器・青磁・石製品・金属製品・木製品 (文化財認定箱数:85箱)   |

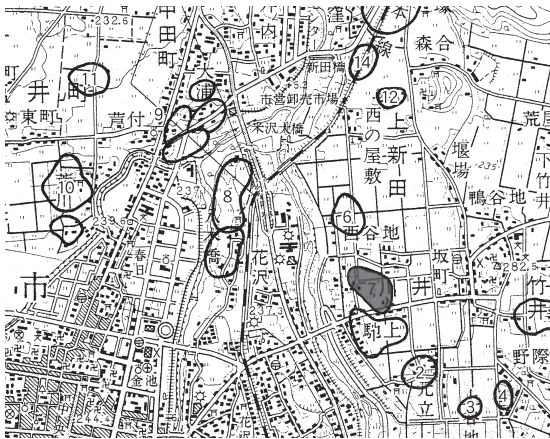


図1 遺跡位置図(1:50,000)

## 調査の概要

西谷地b遺跡は、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地に位置(図1)し、これまで水田として利用されていた。平成21年度に第1次調査が行われ、中世の環濠屋敷(図5)と考えられる遺構や炭窯などが検出されている。川跡からは、古代に属する土器が出土していたため、隣接地にそれらの土器を使用した集落跡が存在することが予想されていた。

今回の第2次調査では、主として古墳時代、奈良時代、平安時代、中世の遺構・遺物が検出されている。遺構は調査区全面(図5)にわたって検出され、南側に接する

馳上遺跡とつながるものと想定される。遺構・遺物とも馳上遺跡と同様のものが多い。ただし、それらの密度などから考えると、古代の遺構の中心は馳上遺跡、中世の遺構の中心は西谷地b遺跡に求められそうである。

## 古墳時代

古墳時代の遺構として確認されたものはないが、土器については調査区の中央部を北西に向かって流れていた川跡から数多く出土した。その分布は川跡(図2)の西側を中心としており、これらの土器を使用していた集落は、調査区の西方に存在したものと考えられる。

出土した土器(図3)には、須恵器を模倣した土師器の坏、高坏、甕、ミニチュア土器(図4)などがある。ミニチュア土器は、須恵器模倣坏を忠実に模倣しており



図2 川跡(南西から)



図3 古墳時代の土師器  
(左：高坏, 右：須恵器模倣坏)



図4 ミニチュア土器

注目される。いずれも6世紀に属すると考えられる。

### 奈良・平安時代

調査区南半部を主たる分布域として、竪穴住居跡 21 棟、掘立柱建物跡 11 棟などが検出された。竪穴住居跡には、全てカマドが付属している。土師器・須恵器（図 11）などの遺物は、カマド付近から特に多く出土した（図 8）。

焼失した竪穴住居跡 ST2584（図 6）が 1 棟検出されており、住居内からは、多量の炭化材と焼土が出土している。焼土は炭化材の上に広く覆いかぶさっており、住居の屋根が土葺きであった可能性を示している。

調査区南端部で検出された 9 世紀前半に属する竪穴住居跡 ST2827（図 7）は、周囲に「U」字状の溝をもつ。また、住居の床面を築造当初に造成した面から、後になって 20cm 程度嵩上げしている。住居外側の溝と併せて、床面付近の湿気対策を施したものと推察される。

ST2827 は、廃絶後人為的に埋め戻され、同じ場所に掘立柱建物が建てられた。埋土からは、革帯の装飾に使用した石製の巡方（図 9・10）が出土した。律令制において、役人の位階を表す遺物である。この時、遺跡の性格が、竪穴住居により構成された集落から、掘立柱建物群か

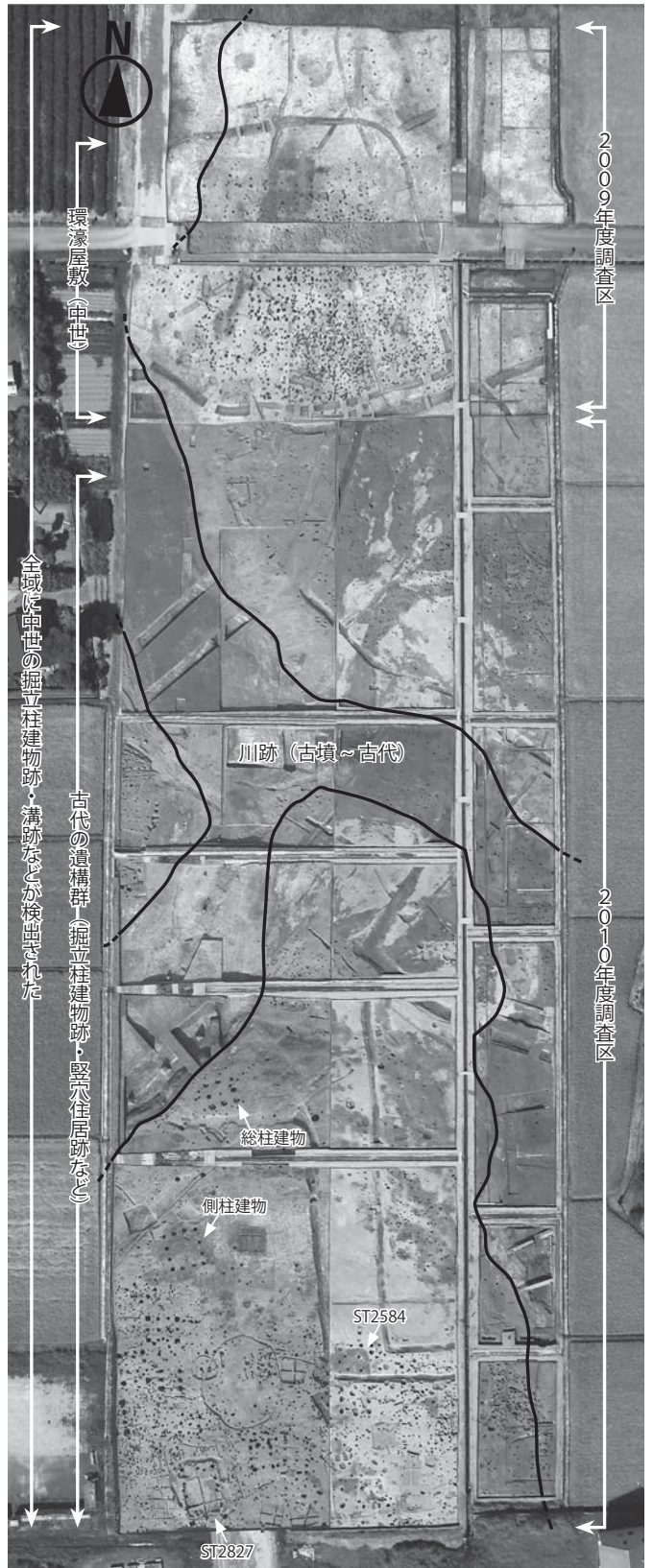


図5 調査区全景（上が北，第1・2次の調査区を合成）

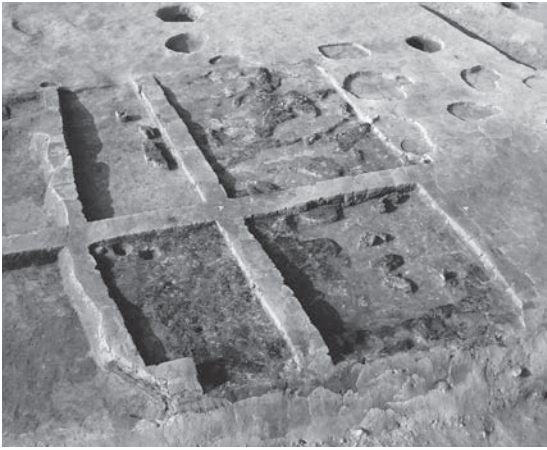


図6 焼失した竪穴住居跡 ST2584 (北東から)



図7 竪穴住居跡 ST2827 と外周の溝跡 (上が南)



図8 竪穴住居跡 ST2827 のカマドと土器 (北から)

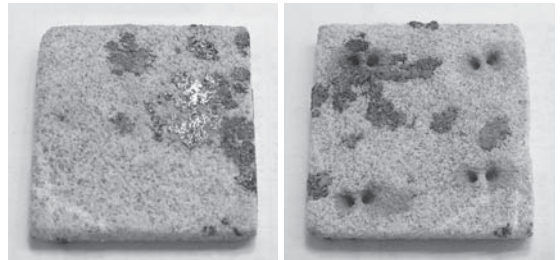


図9 石製の巡方 (表)

図10 石製の巡方 (裏)



図11 奈良・平安時代の須恵器の杯類



図12 総柱建物跡 (倉庫, 東から)



図13 側柱建物跡 (南東から)



図14 溝跡(北から)

らなる官衙関連施設へ変貌したと考えられる。

掘立柱建物跡は、11棟を確認している。内倉庫と考えられる総柱建物跡(図12)は3棟、側柱建物跡(図13)は8棟である。建物の方角は、ほぼ北を向くものと、北でやや西へ振れるものがあり、両建物群の間には時期差が存在すると思われる。柱を立てた穴である柱穴は、ほかにも数多く見つかっており、さらに幾つかの建物が復元できそうである。

川跡からは、奈良・平安時代に属する土器も出土している。川跡内は当時の水流により、堆積土が攪拌かくはんされていたため、古墳時代から平安時代までの土器が、遺構内に混在している状況である。なお、中世までにこの川跡は完全に埋没したため、中世の遺構群は埋没した川跡上でも多く検出された。

### 中世

第1次調査では、一辺約45mの溝跡に囲まれた屋敷跡が検出された。溝跡の幅は最大で2.5mである。その内側では無数の柱穴が検出され、数多くの掘立柱建物が



図16 中世の土器(上段:内耳土鍋,下段:播り鉢・青磁)



図15 溝跡出土の木製品(上・右:下駄,左:漆椀)

存在していたことが判明した。屋敷内の遺構からは、主に13～14世紀に属する遺物が、屋敷を囲む溝跡の埋土からは、16世紀の内耳土鍋などが出土した。

第2次調査でも数千基の柱穴が検出され、多数の掘立柱建物の存在が確認された。これらの柱穴は10条ほどの溝跡によって区切られている。溝跡は重複する場合もあり、土地の区画が幾度かやり直されたことが分かる。溝跡の中からは、やはり16世紀の内耳土鍋(図16)が出土しており、この時までには埋め戻されたことが確認された。ほかに、下駄・曲物・折敷・漆椀(図15)などの木製品、硯・茶臼なども出土した。中には伊達家の家紋が描かれた漆椀(図17)もあり、伊達家に関連する人物が住まいした可能性が高いと言える。

16世紀に溝が埋め戻された後の遺物・遺構は認められず、遺跡付近は田畑になったものと考えられる。その頃は伊達氏が米沢に本拠地を移した時期であり、溝を埋め立てるなどの土地の再開発が行われたのも、本拠地移転が契機となったのであろうか。



図17 内面の底に伊達家の家紋が描かれた漆椀

# まつはし 松橋遺跡

遺跡番号 平成11年度登録  
調査回数 第1次  
所在地 村山市大字名取字松橋  
北緯・東経 38度30分03秒・140度22分15秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢）  
調査面積 4,200㎡  
現地調査 平成22年5月17日～9月26日  
調査担当者 氏家信行（現場責任者）・高橋敏・千田一志・佐藤智幸  
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 平安時代・中世  
遺構 掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡・柱穴等  
遺物 土師器・須恵器・陶磁器（文化財認定箱数：6箱）



図1 遺跡位置図（1：50,000）

## 調査の概要

遺跡は、村山市東部に位置し、村山市役所から北西へ約500mの名取地区の松橋集落の自然堤防上に立地する。現況は畑地・果樹・宅地で南側を市道浮沼名取線が西側を市道裏田線が走る。

遺跡は、平成11年度に山形県教育委員会によって登録され、平成21年度に実施された試掘調査の結果、溝跡や柱穴が検出され、土師器などの遺物が出土したことから、発掘調査が必要と判断された。

今回の調査は、東北中央自動車道（東根～尾花沢）の建設工事に伴う緊急発掘調査として行った。

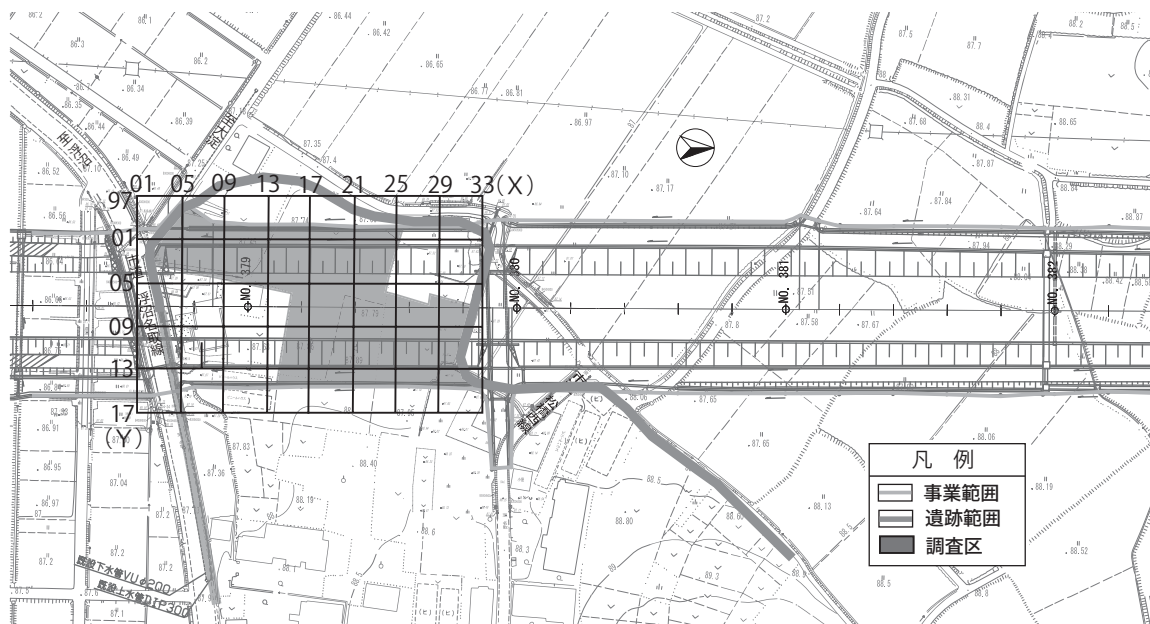
調査は、事業実施範囲の宅地部分を除く約4,200㎡について行った。工程は、重機を使用して表土を掘削した後、土を削る遺構検出作業、そして、遺構精査と併行して写真撮影や図面作成などの記録作業を進めた。

## 遺構と遺物

調査では、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡、柱穴跡などが検出された。

建物跡は、4棟確認された。2間×4間の規模で、北と南に庇をもつもの。同じく2間×4間の規模で西側に庇をもつもの。この2棟は、L字型に配置されることから同時期の建物と考えられる。その他、倉庫と思われる2間×3間の中央にも柱穴をもつ総柱の建物跡や溝に囲まれた建物跡がある。そして、塀と考えられる柱列跡も庇を持つ建物の南側に検出された。

井戸跡は、12基確認された。全て素掘りのもので、開口部が広く、底面が狭くなるものと開口部と底面の広さがほぼ同じになるものが認められ、その形態の違いから平安時代のもものと、中世のものがあると考えられる。中には、ほぼ完形の土器が出土したものの、埋める際に石



調査区概要図 (S = 1:2,500)

を投げ込んだ様相を示すものも検出された。また、井戸跡の覆土からは、火山灰が検出されている。この火山灰は、青森県と秋田県の県境にある、915年に噴火した十和田火山灰の可能性がある。

土坑には、焼土と共に多くの土器片が出土したものがあり、埋め戻す際に破損した土器を焼土とともに廃棄したと考えられる。

溝跡は、南北方向と東西方向に延びるものが10条ほど検出された。調査区を南北に走る溝跡からは、中国の龍泉窯所産の青磁が出土している。

遺物は、平安時代の土師器や須恵器などが出土したが、土師器が大半を占め、須恵器は僅かである。土師器は赤褐色の素焼きの土器で、坏や高台付坏、甕などが出土し、墨で文字の書かれた墨書土器も見つかった。

須恵器は、窯で焼かれた灰色の土器で、坏や甕の破片が多く、壺の底を硯に転用したと思われるものも出土している。

### まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが検出され、土師器、須恵器、磁器などが出土した。出土した土器の底部の切り離し技法や器形、火山灰などから9世紀後半～10世紀前半頃の平安時代の遺跡と、龍泉窯産の青磁片から15世紀頃の中世の集落跡である

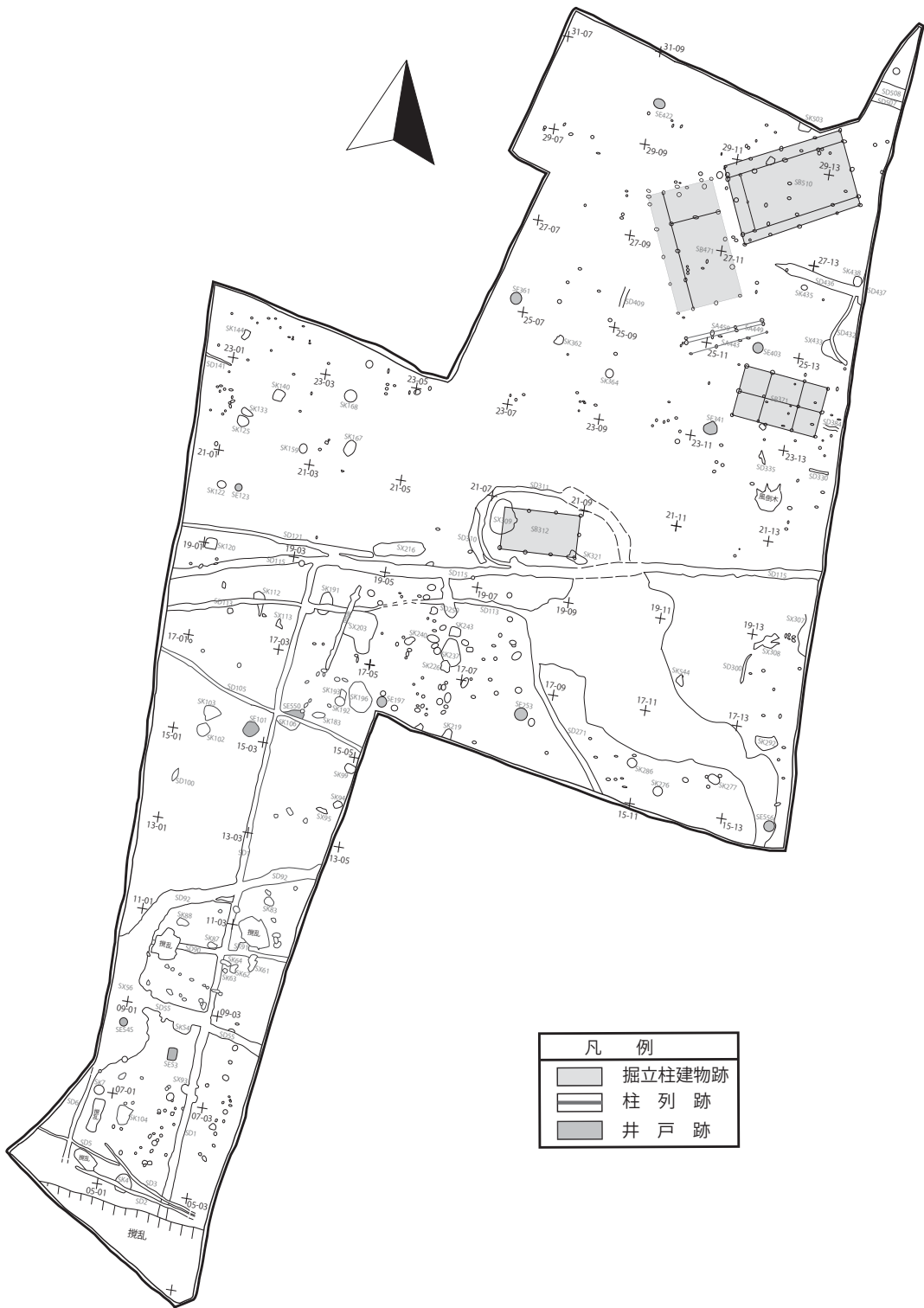
ことが明らかになった。また、溝跡や井戸跡が多く見つかったことから、豊富な水を利用して人々が生活を営んでいたことが窺える。但し、今回の調査区では、竪穴住居跡が検出されなかったことや、主な遺構の集中区域から集落の中心は今調査区の東側にあると考えられる。



調査区全景 (北から)



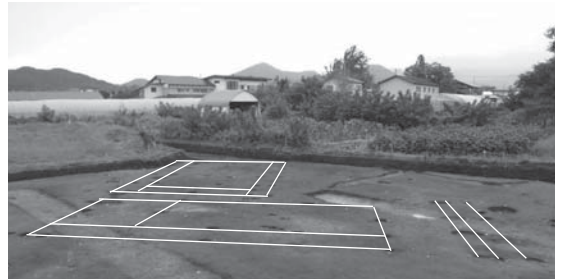
記録作業風景 (北から)



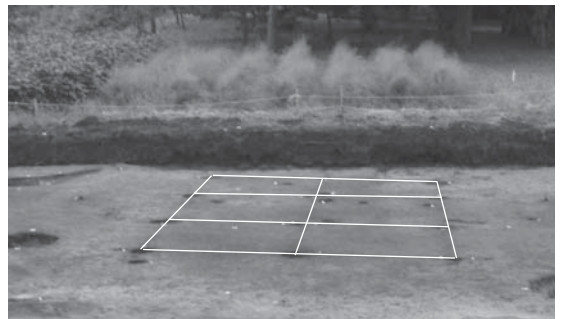
遺構配置図 (S = 1:500)



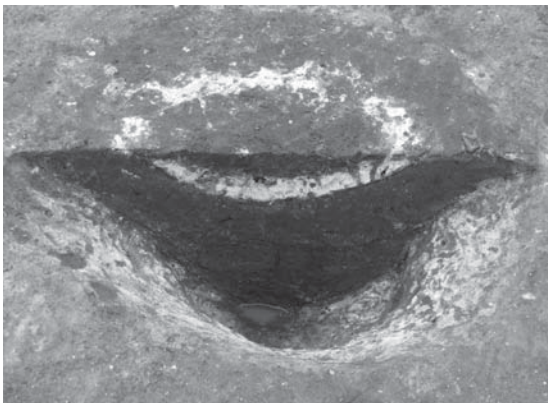
遺跡全景（南から）



庇をもつ建物跡（南西から）



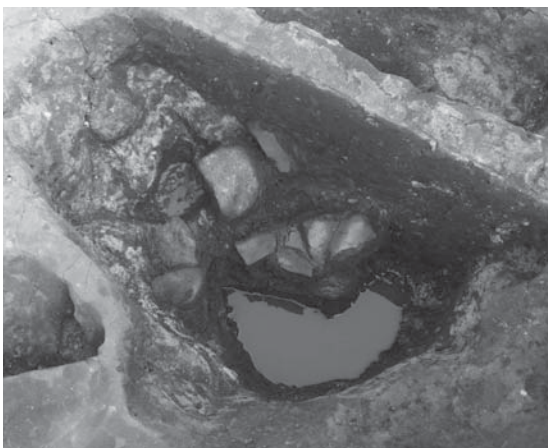
2間×3間の総柱の建物跡（西から）



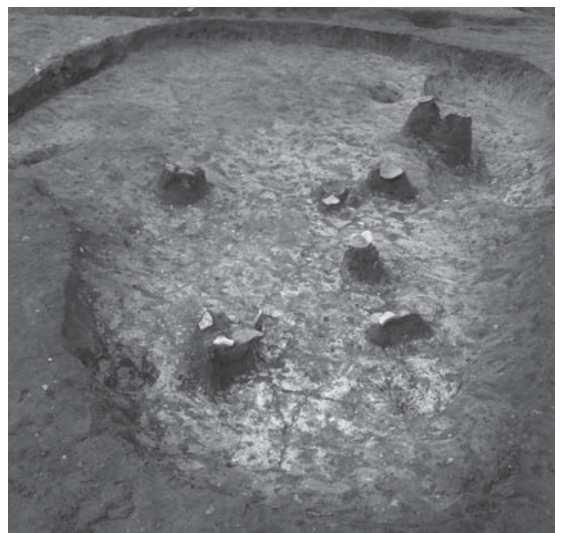
火山灰が堆積した井戸跡（東から）



溝が巡る建物跡（北から）



石を入れて埋めた井戸跡（北から）



土坑の遺物出土状況（北から）



# たむかい 田向遺跡

遺跡番号 平成11年度登録  
調査回数 第1次  
所在地 村山市名取字田向  
北緯・東経 38度30分17秒・140度22分12秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起回事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）  
調査面積 4,000㎡  
現地調査 平成22年5月17日～8月24日  
調査担当者 高橋 敏（現場責任者）・佐藤智幸  
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 縄文時代・平安時代  
遺構 溝跡、土坑、柱穴  
遺物 陶磁器・土師器・須恵器（文化財認定箱数：1箱）



図1 遺跡位置図（1：50,000）

田向遺跡は、最上川右岸の河島山丘陵南麓に広がる低地部で、山形盆地と尾花沢盆地の境に立地する。県教委の分布調査の結果、調査予定範囲の中央部は過去の開田による削平を受けたことにより調査から除外され、南側（A区）3,600㎡と北側（B区）400㎡とに分け調査を実施した。A区は開田による削平が激しく、北西部分で遺構を少数ながら検出することができた。見つかった遺構は、溝跡、土坑、柱穴など約300基程度である。いずれの遺構からも遺物は出土しなかったため、時代を推定することができなかった。柱穴の中には柱痕跡（アタ



図2 遺跡全景（ラジヘリ撮影）

り）が確認できるものが複数認められた。しかし、建物と確認することはできなかった。B区からは溝跡、柱穴、長方形の土坑が検出された。中でも、長方形の土坑は一気に埋められたと考えられ、墓坑の可能性も考えられたことから、採取した土壌サンプルを詳しく分析し、遺構の性格を検討する予定である。

遺物は表土掘削中に出土した少量の近現代の陶磁器がほとんどで、他に土師器や須恵器が僅かに出土しただけであった。本調査区は遺跡の縁辺で、中心部は調査区西側に広がる畑地部分と推定される。

## たむかい 田向2遺跡

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | 平成21年度登録                                |
| 調査回数  | 第1次                                     |
| 所在地   | 村山市名取字田向                                |
| 北緯・東経 | 38度30分18秒・140度22分12秒                    |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                   |
| 起因事業  | 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）                       |
| 調査面積  | 2,500㎡                                  |
| 現地調査  | 平成22年5月17日～8月27日                        |
| 調査担当者 | 三浦勝美（現場責任者）・大場正善                        |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所 |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 奈良時代・平安時代                               |
| 遺構    | 竪穴状遺構、焼土遺構、井戸跡、溝跡、土坑                    |
| 遺物    | 土師器・須恵器（文化財認定箱数：1箱）                     |



図1 遺跡位置図（1：50,000）

田向2遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地の境にある、河島山丘陵の南麓につながる低地部に立地する。見つかった遺構には、竪穴状遺構、焼土遺構、溝跡、井戸跡、土坑がある。竪穴状遺構は約2m四方で、外縁を浅い溝状の遺構がめぐり、全体に浅く窪む。遺構の堆積土から土師器片が、中央から木炭が見つかった。また、この遺構の南西角に、土師器片が出土している焼土遺構もあることから、竪穴状遺構は住居跡で、焼土遺構がカマド跡である可能性もある。溝跡は、長さ5m（SD5）と、21m（SD9）がみつかっており、堆積土から、平安

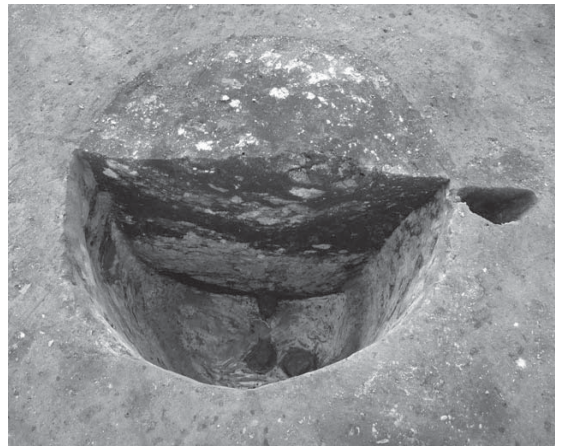


図2 SE 10井戸跡

時代のもと考えられるロクロでつくられた土師器（はじき）が見つかっている。いずれも東西方向であることから、同一の溝跡の可能性もある。井戸跡は、調査区の西端（SE3）と南西（SE10）の2か所で見つかっている。ともに深さが約1.5mほどで、地下水が染み出す青灰色の粘土層まで掘り下げられた素掘りの井戸である。SE10井戸跡の堆積土からは、丸底で体部に段のある非ロクロ製の土師器片（はじき）が、内面に漆（うるし）が付着した状態で見つかった。土坑は、遺構の形状から、地下室状の遺構や、貯水槽跡（ちよすいどう）、用途不明の方形の土坑が見つかった。

# きょうづかもり 経塚森遺跡

遺跡番号 平成11年度登録  
調査回数 第1次  
所在地 村山市名取字経塚森  
北緯・東経 38度30分37秒・140度22分11秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）  
調査面積 3120㎡  
現地調査 平成22年5月17日～8月27日・10月19日～11月30日  
調査担当者 三浦勝美（現場責任者）・大場正善・安部将平  
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 平安時代  
遺構 掘立柱建物跡、溝跡、土坑  
遺物 土師器・須恵器（文化財認定箱数：1箱）



図1 遺跡位置図（1：50,000）

経塚森遺跡は、村山市役所より北西約3km、さくらんぼカントリークラブゴルフ場南部の丘陵に立地し、現在は畑地である。

見つかった遺構には、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、ピットがある。掘立柱建物跡は、調査区の中央で、2棟が東西に並んだ状態で見つかった。いずれも柱間は2×2間、規模は約3.5m×約3.3mである。柱穴の掘り方は円形で、直径は約30cmとなっている。全体としては小規模であるため、小型の倉庫として使用された可能性がある。溝跡は、南西―北東方向に、長さ約12m幅

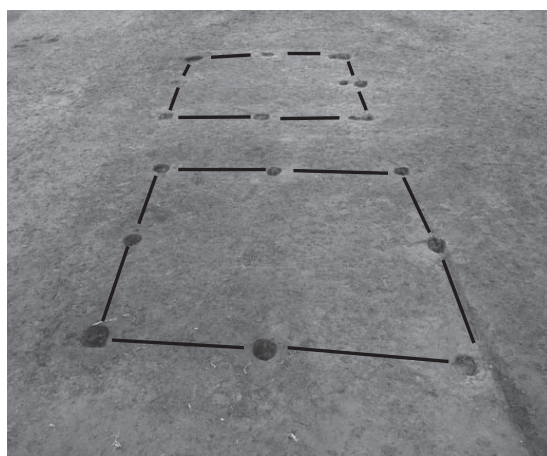


図2 掘立柱建物跡S B 20（前）・S B 30（奥）

約70cmのものと、長さ約2m幅30cmのものがみつかっており、同一の遺構と考えられる。

遺物では、ロクロでつくられた土師器や須恵器といった土器が見つかっており、平安時代のもと考えられる。しかし、遺構内部から見つかったものではなく、耕作土である表土層や、その下の黒色土層から見つかったものがほとんどである。おそらく、西側の丘陵から流れてきたものではないかと考えられる。今回の調査区は、遺跡範囲東側の低地にあたることから、集落の中心は西側の丘陵地にあったのではないかと考えられる。

# 清水遺跡 (1)

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | 平成11年度新規登録                              |
| 調査回数  | 第1次                                     |
| 所在地   | 村山市大字名取字清水南                             |
| 北緯・東経 | 38度30分45秒・140度22分16秒                    |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                   |
| 起因事業  | 東北中央自動車道(東根～尾花沢)                        |
| 調査面積  | 6,020㎡                                  |
| 現地調査  | 平成22年5月17日～11月30日                       |
| 調査担当者 | 高桑登(現場責任者)・庄司昭一・天本昌希・戸田敬・三浦勝美・安部将平      |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所 |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 縄文時代・平安時代                               |
| 遺構    | 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑・柱穴等                  |
| 遺物    | 土師器・須恵器・縄文土器・石器(文化財認定箱数:41箱)            |



図1 遺跡位置図(1:25,000)

## 調査の概要

清水遺跡は、最上川右岸の丘陵山麓部に位置し、丘陵東側の清水集落のほとんどを含む広大な遺跡である。遺跡の西半部に高速道路の建設が計画されたため、建設に先立って発掘調査を実施した。南北に長い遺跡のため、遺跡の南端部を清水遺跡(1)、北端部を清水遺跡(2)として調査を実施している。

調査は遺構・遺物の粗密を確認するためのトレンチ調査から実施した。トレンチ調査の結果、事業範囲内の全面に遺構・遺物の分布が認められた。このため、事業範

囲を南北に分け、平成22年度に南半部、平成23年度に北半分の調査を実施することとした。

遺跡南端部の低地を挟んだ西側の丘陵には、経塚森遺跡が立地している。

## 見つかった遺構と遺物

調査区内を通る農道や水路によってA～D区に分割して調査を行なった。

A区の西半部及びD区は両側の丘陵に挟まれた谷状に低い地形で、旧河道と考えられる。この場所からは、大小の溝跡が多く見つかった。排水や灌漑のために掘られた溝の可能性もある。溝は10～50cm程の深さで、部分的に1m程に深く掘られる。その周辺から土師器や須恵器など平安時代の土器が多量に出土している。

溝の一部に方形に掘り広げられた箇所があり、その上流部に杭列の痕跡が認められた。底面には数センチ大の礫が敷き詰められており、水場として利用されたと考えられる(図2・3)。水場周辺の堆積土最上層には灰白色の火山灰が堆積しており、西暦915年に噴火したとされる十和田火山の火山灰の可能性もある。火山灰堆積層の下層からは大量の遺物出土している。完形の坏や墨書土器なども多く、水辺の祭祀に伴う遺構の可能性もある。墨書土器は「縄」の字が多く認められる(図6)。

周辺の遺跡では、河北町の熊野台遺跡と同じ「縄」の墨書土器が1点出土している。村山市内では清水遺跡(2)、西原C遺跡で数点の墨書土器が出土している。

A区の東半部は後世の開墾により大部分が削平されていた。調査区全域に渡って、倒木痕と考えられる大型の土坑が多く見つっている。A区西半部では遺構検出面の約50cm下に黒色粘土層が堆積しており、その下からも溝跡等が検出されている。

A区の北端部、B区、C区の南西部は、丘陵と低地の境界部にあたり、この周辺から竪穴住居跡が5棟見つかった。C区南東部の大型竪穴住居跡からは床面に焼土の痕跡が多く検出されており、工房と考えられる。この竪穴住居跡から金属製の帯金具が出土した。竪穴住居跡の堆積土(図5)や土坑などからも火山灰が検出されている。火山灰は竪穴住居跡の上層や、竪穴住居を切る土坑から検出されている例が多い。

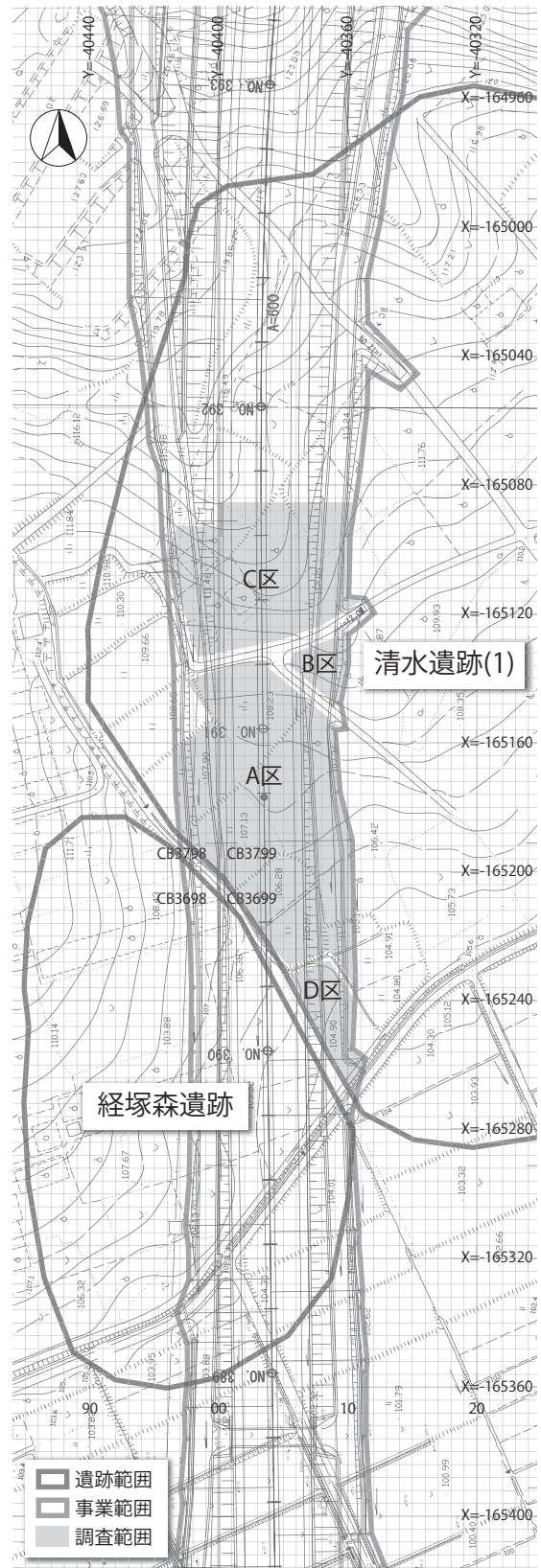
この他、少量の縄文土器、石鏃が出土している。ただ、縄文時代の明確な遺構が認められないことから、縄文時代においてこの地は居住の場所としてではなく、狩猟場として利用されていたと考えられる。

### まとめ

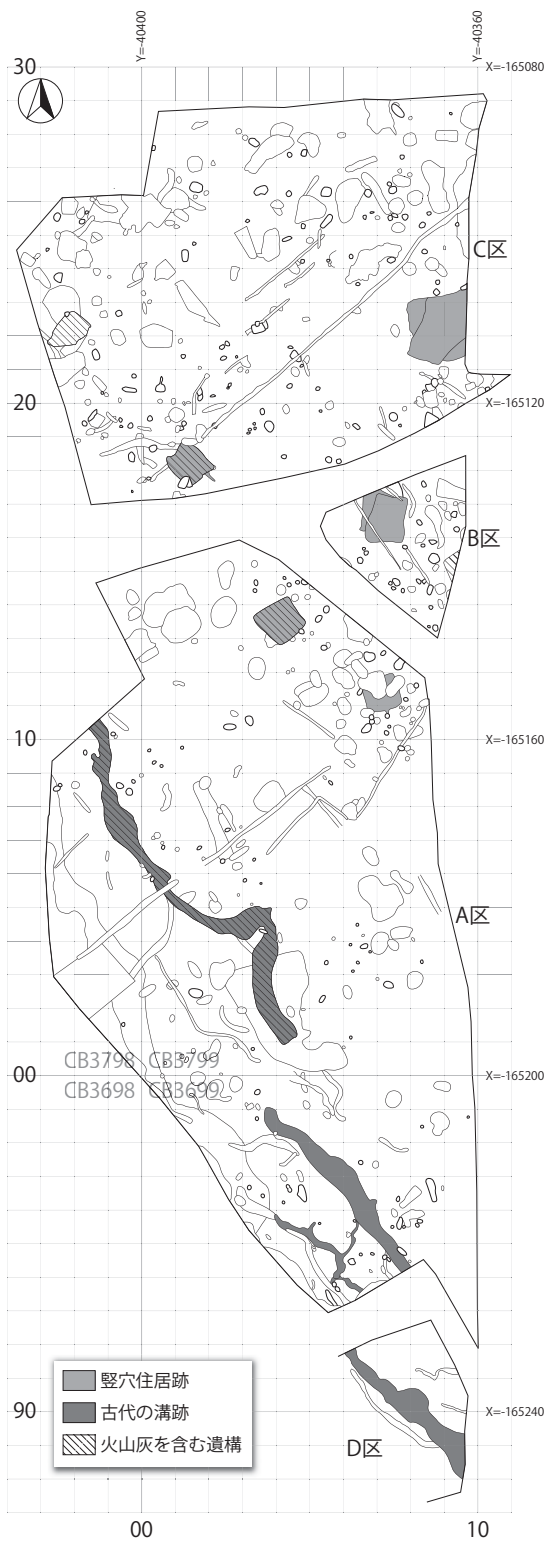
今回の発掘調査の結果から、丘陵の裾部に竪穴住居が並び、低地には排水や灌漑のための溝が掘られている景観が想定できる。今回の調査では確認できなかったが、低地には水田があったと考えられる。火山灰の堆積している様子や出土した土器の特徴から、集落が存続した時期は9世紀後半頃で、火山灰が降った10世紀初頭には集落はすでに廃絶していたと考えられる。



調査前状況(南から)



調査区概要図(1/2,000)



遺構配置図 (1/800)



図2 溝跡遺物出土状況 (北から)



図3 溝跡遺物出土状況 (北東から)



図4 調査区全景（北から）



図5 調査区全景（上が北）

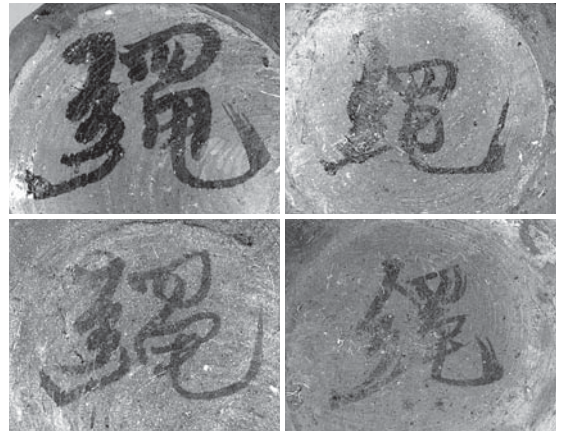


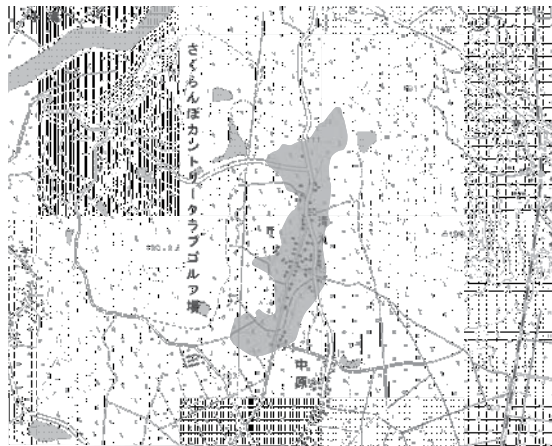
図6 溝跡出土墨書土器



図7 竪穴住居跡調査状況（東から）

## 清水遺跡 (2)

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | 平成11年度登録                                |
| 調査回数  | 第1次                                     |
| 所在地   | 村山市大字名取字清水北                             |
| 北緯・東経 | 38度31分7秒・140度22分23秒                     |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                   |
| 起因事業  | 東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設                      |
| 調査面積  | 4,900㎡                                  |
| 現地調査  | 平成22年5月18日～11月30日                       |
| 調査担当者 | 齋藤健（現場責任者）・中里秀樹・江波大・伊藤純子・山田めぐみ          |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所 |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 平安時代                                    |
| 遺構    | 掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡・土坑・ピット                  |
| 遺物    | 土師器・須恵器・金属器（文化財認定箱数：33箱）                |



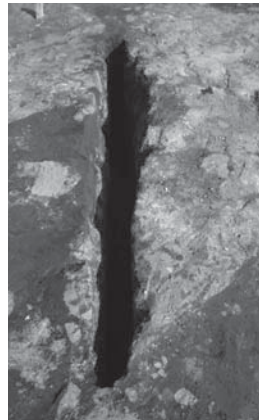
遺跡位置図 (1:25,000)

### 調査の概要

清水遺跡は、村山盆地北部にある村山市のほぼ中央に位置し、最上川が大きく蛇行する右岸部にある丘陵の東斜面に立地する。

今回の調査は、東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設工事に伴って行なわれたもので、遺跡範囲が広いため南端の調査を「清水遺跡（1）」、北端の調査を「清水遺跡（2）」の二つに分けて調査した。

今年度は、5月からトレンチを設置して確認調査を実施した。その結果を受けて、遺構及び遺物の分布が確認



SD1007 おとし穴（東から）



SD1009 おとし穴（東から）

できた範囲から、約4,900㎡についてのみ発掘調査を実施した。

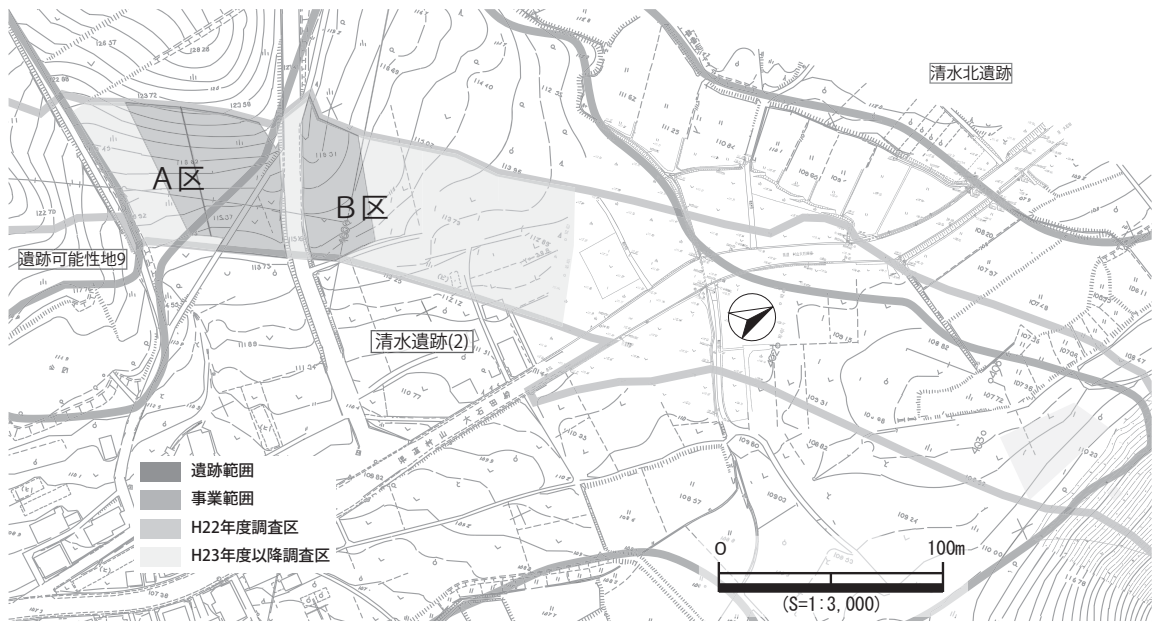
### 遺構と遺物

今年度調査区を南からA区、B区とした。

A区は丘陵の斜面である。丘陵の裾野部分には、いわゆる黒ボク土の層が広がっているため、遺構検出は困難を極めた。

検出された主な遺構は、竪穴住居跡24棟・掘立柱建物跡3棟・土坑など、主に平安時代のもつと見られる遺物が出土した。





調査概要図

これらの遺構の覆土には、西暦915年に噴火したとされる十和田aとみられる灰白色火山灰が確認されたものもあった。

B区は、現状では緩斜面であるが、丘陵の斜面に大幅な造成を行って畑地として利用していたものである。そのため、削平・攪乱が激しく、遺構の残存状況があまり良くなかった。主な検出遺構は、縄文時代のものと考えられる長さ4m、幅0.3m、深さ1mほどのおとし穴が4基、平安時代の竪穴住居跡1軒と竪穴住居跡の炉跡とみられる焼土遺構が1か所である。

多くの竪穴住居跡には、南壁に円形のカマドが付属している。大きさは一辺4mあまりから10mを超える大形のものまであった。A区斜面上では5軒が重複しており、短期間での建て替えの可能性も考えられる。他に同じ地点にここまで重複して建てられたものは無いので、何らかの特別な理由があって、同じ地点に建て替えを行ったとみられる。また、斜面に造成されたST100、101竪穴住居跡には、張り出しが設けられていた。ST137竪穴住居跡は焼失住居で、焼けた建材と共に土器が出土した。

これらの住居跡の内部からは、主に須恵器の坏や土師器の坏・甕などが出土している。また、ST5竪穴住居跡からは<sup>とうす</sup>刀子が出土した。いずれも土器の形態から、平安時代の9世紀代に使用されていたと見られる。

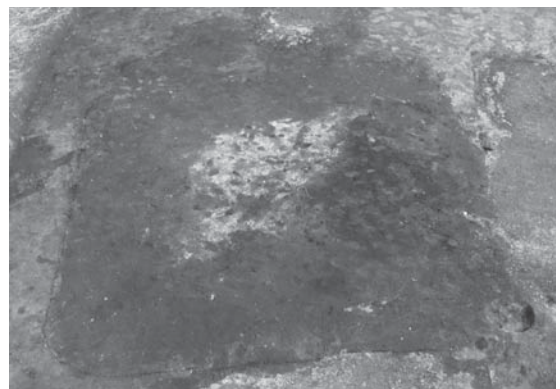
掘立柱建物跡は3棟あり、柱間が2間×3間のものと2間×2間のものがある。いずれも竪穴住居跡と向きを合わせているので、同時期の建物とみられる。

### まとめ

今回の発掘調査の結果、清水遺跡(2)は、水はけのよい丘陵の斜面地に竪穴住居が並ぶ集落であることが判明した。斜面の標高が高いところには、大形の竪穴住居跡が4回建て替えられている。さらに、張り出しを持つ特徴的な竪穴住居跡も見られた。

火山灰の堆積している様子や、出土した土器の特徴から、集落は9世紀後半から10世紀初頭頃に廃絶したと考えられる。

調査は来年度以降も継続する予定で、さらに詳しい成果が上がるのが期待される。



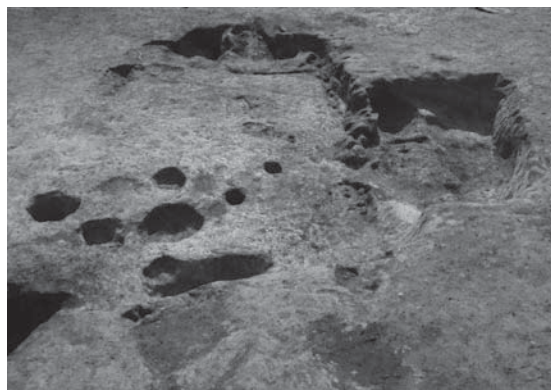
ST1002 竪穴住居跡灰白火山灰検出状況(西から)



遺構配置図



ST63 竪穴住居跡完掘状況 (北から)



ST101 竪穴住居跡完掘状況 (北から)



竪穴住居跡 ST137 完掘状況 (南から)



ST137 竪穴住居跡遺物出土状況 (北から)



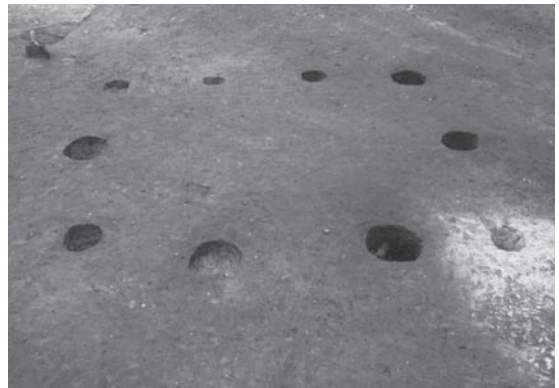
斜面を造成した ST5 竪穴住居跡完掘状況 (北から)



竪穴住居跡 ST5 出土刀子 (北から)



竪穴住居跡 ST56 内カマド完掘状況 (北東から)



掘立柱建物跡 SB67 完掘状況 (北から)



A区全景 (北東から)

# 東熊野苗畑遺跡

遺跡番号 628

所在地 村山市大字本飯田字熊ノ山

北緯・東経 38度31分40秒・140度23分3秒

調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所

調査原因 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）改築事業

調査面積 2,250 m<sup>2</sup>

現地調査 平成22年5月18日～11月30日

調査担当者 齋藤 健（調査主任）・大場正善・川崎康永・濱松優介

調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所

遺跡種別 集落跡

時代 縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代

遺構 竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・柱穴・河川跡・土器集中部等

遺物 縄文土器・石器・土師器・須恵器（文化財認定箱数：10箱）

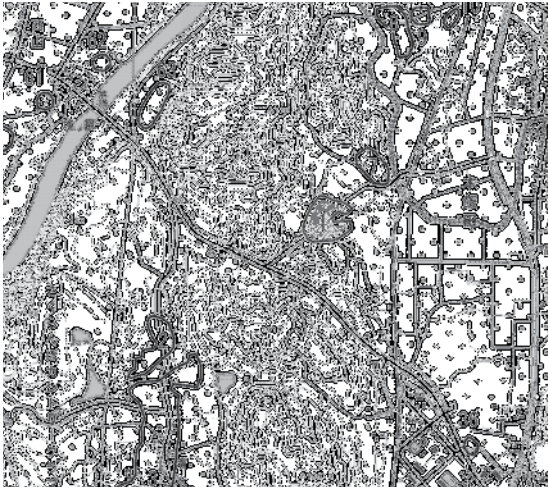


図1 遺跡位置図（1：25,000）

## 調査の概要

東熊野苗畑遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地の境界、最上川三難所隼の瀬から約3km離れた本飯田字熊ノ山に位置する（図1）。地形的には、隼橋付近から南東に延びる谷筋の、さらにゆぎ温泉の南約200mから東に分岐する浅い谷間（袖崎低地）に立地している（図2）。本遺跡では、縄文時代、古墳時代、および平安時代の遺構・遺物、そして埋没した最上川の支流が発見された。

今回、東北中央自動車道に係る発掘調査の一環として、本遺跡の約2,250 m<sup>2</sup>の範囲を対象とした発掘調査を行った（図3）。調査区は、北側の一段高いI区と、地形に沿っ



図2 調査区から西南方向を望む（谷地形がよくわかる）

て低くなっている南側のII区に便宜的に分けている。見つかった遺構は、I区でその東側に集中する竪穴状遺構、掘立柱建物跡、溝などで、II区では調査区の東西に走る河川跡、土師器片や須恵器片が密集して分布していた土器集中部などである。

なお、調査区では、I区の東側に戦前～戦後と思われる水田造成と、II区全体に昭和50～60年に行われた圃場整備によって、大きな土地改変が行われている。

## 遺構

### （1）I区

I区の東側では、竪穴状遺構（ST10）と掘立柱建物跡（SB25・SB67）、幅約30cmの浅い溝跡（SD4・SD5・71）が発見された。ST10は、南側の一部が近現代の水田

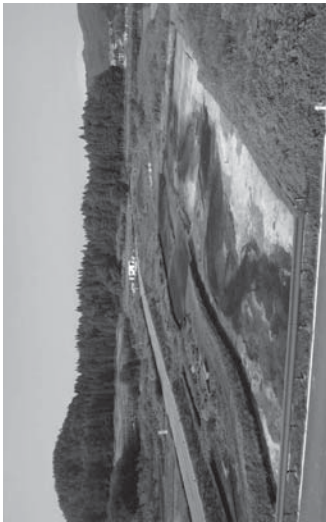


図3 河川跡検出状況(西から東へ撮影)

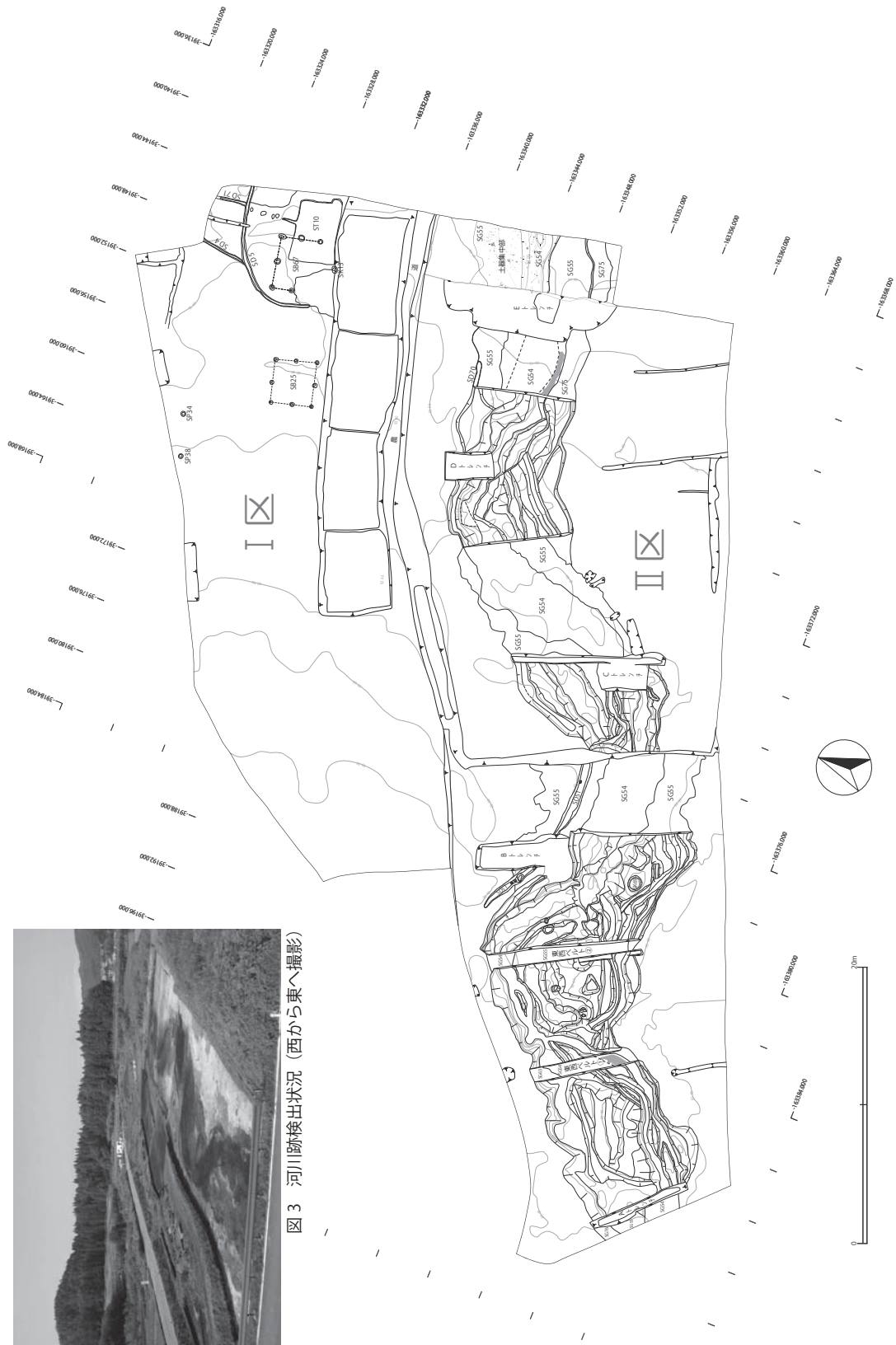


図4 調査区全体図(河川跡では、時期の異なる蛇行した流路が、多数重なっていることが判った)



図5 ST10 竪穴状遺構（南から）

造成で壊されていたが、本来は、約4m四方の大きさであったと思われる（図5）。遺構の堆積土からは、9世紀ごろと思われる土師器の長胴甕や須恵器片が出土した。

SB67は、ST10に重複し、南側が風倒木と近現代の水田造成によって破壊されていた。SB25は、ST10よりも約2m西に離れており、2間×2間の正方形の形をしている（図6）。

SD5はST10とSB67を囲むように設けられ、その西側の途中で分岐するようにSD4がつながる（図5の奥）。とくに、SD5の底部からは、古代に噴火し、遺跡周辺に降灰したとみられる灰白色の火山灰が認められた。

## （2）Ⅱ区

**河川跡** Ⅱ区では、現地形の低地部で、東西に走る河川跡が発見された（図3・4）。高低差から、西側が上流で、東側が下流になる。深さは、圃場整備で上部が削平されているものの、現存で0.6～2m程度あり、東に行くほど深くなる。河川跡の輪郭を平面上で検出した時点では、蛇行した4本程度の流路跡が、さらに河川跡を完掘した箇所底面では、いく条もの流路跡を確認することができた。また、部分的に掘り下げたA～Eトレンチの土層の断面観察からは、4本以上の流路跡が認められた。それぞれの流路では、流水していたことを示す砂礫層と、止水に近い状態、すなわち湿地状態であったことを示す黒色の粘土（泥）層が互層をなしている。

したがって、これらのことから、Ⅱ区で見つかった河川跡では、蛇行した流路が流水と湿地の状態を交互に繰り返していたこと。さらに、流路が埋没したのちに、ふたたび流路がわずかに流れの方向を変えて現れ、流水と



図6 SB10 掘立柱建物跡（南から）

埋没を繰り返していたことが判った。

河川跡の年代については、現在進めている理化学分析の結果次第であるが、出土遺物から判断すれば、少なくとも、縄文時代中期頃には流水していた可能性がある。そして、古代に降灰したと考えられる火山灰が堆積したあとは、1回程度の流水があったのち、埋没し、河川としての機能をほぼ失ってしまったことが判った。

現在では、すでに水が流れる流路を見ることはできない。しかし、谷地形の底部に沿って湿地が拡がり、近年に水田や溜池などが造成されていた。調査中も、湧水に悩まされ、また地山層の大部分が地下水が流れていることを示す、青灰色のグライ層を確認している。したがって、河川跡は、埋没したのちも、地下水脈として役割を果たしていたと言える。

河川跡からは、縄文土器、石器、古墳時代前期と思われる土師器、古代の土師器と須恵器、樹木、種子、昆虫化石が出土した。とくに、縄文土器や石器は、SG54よりも古い流路跡の底部付近の層序から出土した。そして、これらの遺物には、表面に磨滅した痕跡が認められる。調査区内に縄文時代の遺構は見られないので、これらの遺物は、調査区外の上流部にある縄文時代の遺構から流されてきたものと思われる。

河川跡から出土した樹木や種子などの自然遺物は、今後、土壤に残る花粉化石の分析を合わせて、当時の本遺跡周辺がどのような気候であったか、そしてどのような植物が生い茂っていたのかを明らかにする資料となる。

**土器集中部** 河川跡東端の北岸と、それに隣接する流路では、火山灰層の直下から300点以上の土師器片・須恵器片などの遺物が、約2.5m四方の範囲に集中して出

土した(図7)。

岸辺で遺物が出土した土層と火山灰層からは、流水を示す砂礫を認めることができない。また、土器片の表面には、農耕具などの引掻き傷が見られない。つまり、土器が出土した岸辺付近は、流水や、後世の土地改変の影響がなかったと言える。また、岸辺出土の土器片のほとんどは、内外面を岸辺平面と並行であった、すなわち自然な状態を保って出土した。したがって、岸辺付近の遺物は、火山灰降灰直前に散らばった当時の状態をほぼ保っていた、ということが言えよう。

そして流路跡から出土した遺物は、岸辺出土土器片が分布する範囲と南側に隣接するように分布していた。また、土器片を元の個体ごとに分別した結果、岸辺と流路跡で出土した土器片には、同一個体があることが判った。さらにそれぞれの個体同士同士の接合する

ことが多い。つまり泥層からの出土を考慮すれば、流路跡出土の土器片は、上流から流されてきたものでなく、流路が止水し、湿地であったときに分布したものであると考えられる。言い換えれば、岸辺と流路跡の遺物は、ほぼ同時期に分布したものであるとも言える。

土器片の分布状況は、個体ごとで一定のまとまりはあるものの、おおむね混在した状態である。土器の破断面同士を平面図上で線で表すと、一部分を除き、おおむね破断面同士が隣り合っているものが少なく、互いに離れ、接合線が複雑に入り組んでいることが判った。土器片には、打ち割った痕跡が見られるものもある。特に土師器は、煮炊きに使った痕跡を留めていた。これらの状況証拠から、土器集中部は、“他所でいくつかの土器を打ち割り、破片をまとめて、岸辺と湿地に数回に分けて廃棄した、という当時のヒトの行為が考えられる。

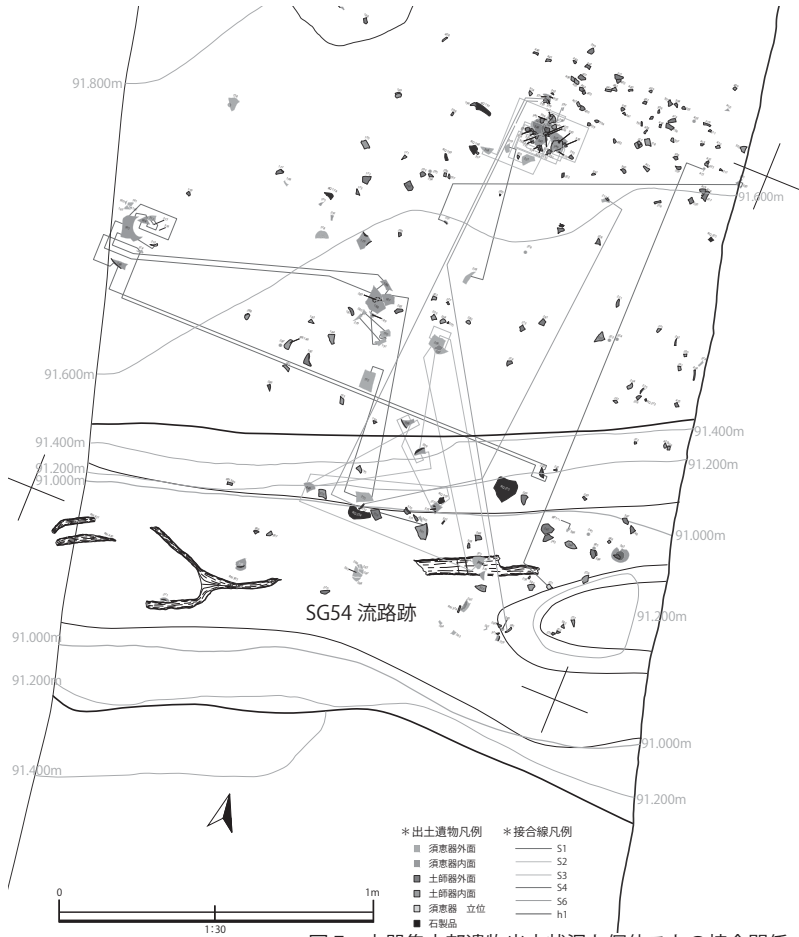


図7 土器集中部遺物出土状況と個体ごとの接合関係

### まとめ

東熊野苗畑遺跡では、最上川の支流とともに、流されてきた縄文時代の遺物や、その周辺に営まれていた古代のヒトびとの生活の一端を示す痕跡が認められた。また、河川跡に残された古環境にかんする試料の解析が進めば、村山盆地北部の当時の気候を加味した、過去の生活像の復原が可能になると考えている。

とくに、土器集中部は、火山灰の降灰直前に行われた、“廃棄行為の痕跡”である可能性が高い。なぜ、土器集中部が見つかった地点で、廃棄行為が行われたのかについては、今後の追究課題となるが、土器集中部の内容を解きほぐすことによって、過去の生活像を垣間見ることができる。本遺跡でそれができるのは、土器集中部が火山灰にパッキングされ、当時の状況を良好に保存していたおかげだ、と言えよう。

# きたはら 北原2遺跡

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | 平成11年度登録                                |
| 調査回数  | 第1次                                     |
| 所在地   | 村山市大字本飯田字北原                             |
| 北緯・東経 | 北緯38度32分18秒・東経140度23分15秒                |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                   |
| 起因事業  | 東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設事業                    |
| 調査面積  | 700㎡                                    |
| 現地調査  | 平成22年5月19日～10月29日                       |
| 調査担当者 | 佐竹弘嗣（調現場責任者）・渡部裕司                       |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所 |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 縄文時代                                    |
| 遺構    | 竪穴建物跡・柱穴・土坑                             |
| 遺物    | 縄文土器・石器（文化財認定箱数：1箱）                     |



図1 遺跡位置図（1：50,000）

## 調査の概要

北原2遺跡は、村山市本飯田地区、JR袖崎駅から南南西約1km、標高約90mに位置する。西側に最上川の支流である沢の目川が流れ、北東に向かってなだらかな丘陵地となり、南端部は東・西・南側を山麓斜面に囲まれている(図1)。これまで畑地として利用されていた。

今年度、国土交通省山形河川国道事務所からの委託を受け、事業区内にかかる7,000㎡を対象面積として発掘調査を実施した。本調査に先駆けて、トレンチ調査を行った。幅1.5m、長さ10～45mのトレンチ17本と2m

四方の坪掘り22箇所合計700㎡を調査面積として設定し掘削を行った。その後、人力による面削り作業で遺構検出作業及び遺構精査を実施し、遺構・遺物の有無を確認した。

## 遺構と遺物

遺構は全体的に希薄である。遺跡範囲の北部から中央部にかけては、淡い黒褐色の土色変化が多数見られた。しかしこれらを遺構と断定するのは難しい。ただ南端部西側トレンチからは竪穴建物跡の可能性が考えられる大型遺構や土坑が検出されている。遺物は南端部西側トレンチの表土下約20～40cmに遺物包含層が認められ、縄文時代の土器片が多数出土した。縄文土器は約3,000年から2,500年前の縄文時代晩期の土器と見られる。

## まとめ

今年度のトレンチ調査により、縄文時代晩期の土器片が多数出土し、竪穴建物跡の存在が推定される遺構も検出された。この結果、来年度2次調査として、南端部西側の約1,050㎡を拡張区として発掘調査を実施することになった。周辺には、縄文時代早期から晩期の土器が出土した赤石遺跡を始め、縄文時代の遺跡が連続して分布している。2次調査により、本遺跡と他遺跡との関連等、当時の集落の様相の解明が期待される。



# きたはら 北原4遺跡

遺跡番号 平成11年度登録  
所在地 村山市本飯田  
北緯・東経 北緯38度32分30秒 東経140度23分18秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起回事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設事業  
調査面積 2,900㎡  
現地調査 平成22年5月21日～11月26日  
調査担当者 佐竹弘嗣（現場責任者）・渡部裕司  
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 縄文時代・平安時代  
遺構 土坑・溝跡・柱穴  
遺物 縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器（文化財認定箱数：2箱）

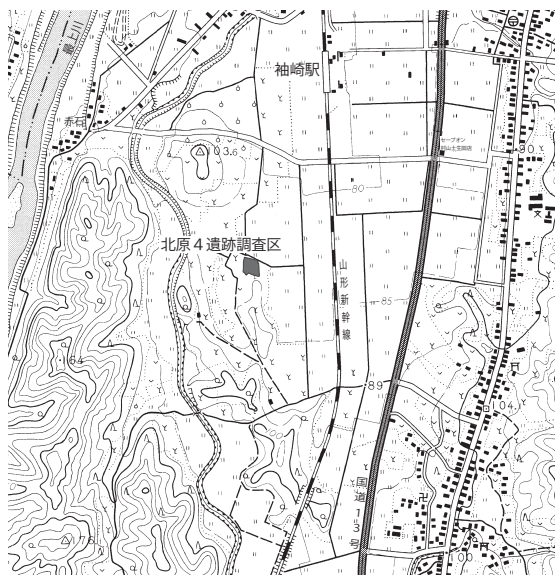


図1 遺跡位置図 (1:25,000)

## 調査の概要

北原4遺跡は、JR袖崎駅から南西800mの地点に位置する(図1)。調査区は遺跡範囲の北側に広がる丘陵部で、高低差は約5mを測る。丘陵の中央部から南側は畑等の造成により攪乱されており、一部では地山面が露出していた。表土を除去し、遺構を検出する段階で縄文土器や石器、須恵器といった遺物が見つかった。検出された土坑や溝跡、ピット等を掘り下げたが、遺構内からは遺物はほとんど出土していない。調査区南東部の

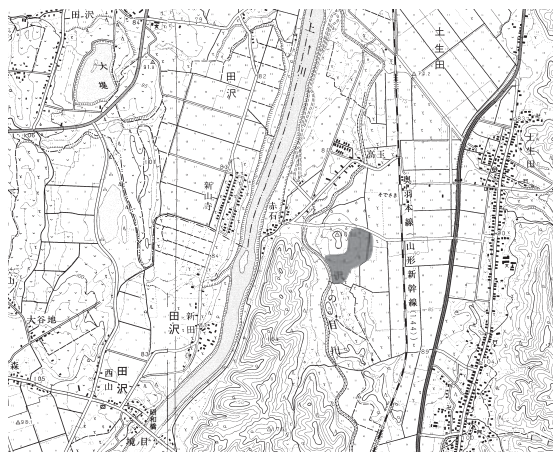


図2 遺物出土状況

最も標高が高い地点では、奈良・平安時代に焼かれた須恵器の破片が複数見つかった。器種は高台付杯と坏蓋等で、胎土・色調などからひとそろいで使われていたものと推測される(図2)。しかしこの出土地点周辺は大きく攪乱を受けており、どのような遺構に伴う土器であるのかは不明である。その他の土器も、小破片で全体の器形が分かるものはない。縄文土器の破片は、施された文様などから縄文時代早期～後期に属する土器であることが分かった。また、調査区の西側では、風倒木の痕跡が複数見つかったが、その内の1つからは縄文時代早期の遺物が出土している。今回の調査によって、縄文時代早期～後期という長い期間および奈良・平安時代に丘陵部が利用されていたことが明らかとなった。

# 沼田 1 遺跡

|       |   |
|-------|---|
| 遺跡番号  | 昭和52年度登録                                |
| 調査回数  | 第1次                                     |
| 所在地   | 村山市大字土生田字沼田3340-5他                      |
| 北緯・東経 | 38度32分43秒・140度23分14秒                    |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                   |
| 起因事業  | 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業                   |
| 調査面積  | 1,200㎡                                  |
| 現地調査  | 平成22年5月19日～7月7日                         |
| 調査担当者 | 渡辺和行（現場責任者）・池田透・後藤枝里子・高柳俊輔              |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所 |
| 遺跡種別  | 集落跡                                     |
| 時代    | 縄文時代・平安時代                               |
| 遺構    | ピット                                     |
| 遺物    | 縄文土器・須恵器・陶器（文化財認定箱数：1箱）                 |



遺跡位置図（1：50,000）

## 調査の概要

沼田 1 遺跡は村山市土生田地区、袖崎駅の南西側に位置する、昭和 52 年度に登録された縄文・平安時代の遺跡である。現在は畑地や果樹園として利用されている。山麓斜面に広がる遺跡で、今回の調査区で標高は 80m を測る。その西側には沢の目川が流れ、周辺には縄文時代早期の赤石遺跡が登録されている。

今回東北中央自動車道（東根～尾花沢間）の建設事業に伴い、事業区にかかる遺跡の中央部分 12,000㎡を対象として発掘調査を実施することとなった。

本調査に先駆けて、拡張区の設定をするため、最初にトレンチによる調査を実施した。調査区は北と南の 2 箇所に分かれ、北側 9 本、南側 13 本、計 22 本（1,200㎡）のトレンチを調査区内に設定し、遺構・遺物の確認を行った。調査は重機による表土除去後、遺構の検出を行い、写真撮影や図面作成などの記録作業を行った。

## 遺構と遺物

トレンチによる調査の結果、調査区全体として、遺構・遺物共に希薄であった。北側の調査区では倒木痕や近代のカクランなどが検出された。南側の調査区ではわずかにピットが検出されたが、いずれも関連性を確認できず、建物跡を構成するには至らなかった。北・南側の調査区共に、ほ場整備事業などで畑地として整備する際に削平されたものと考えられる。

遺物として縄文土器や須恵器、陶器の破片が数点出土したが、いずれも遺構に伴うものではなかった。耕作土である表土層からのものであり、近年の整地に伴う攪拌によるものと考えられる。

## まとめ

以上の調査の結果より、遺構・遺物ともに希薄であり、県教育委員会等との協議の結果、拡張区からの対象除外となったため、トレンチによる調査のみにとどまった。

# 沼田<sup>ぬまた</sup>2遺跡

遺跡番号 平成11年度登録  
調査回数 第1次  
所在地 村山市大字土生田4040他  
北緯・東経 北緯38度32分51秒・東経140度23分16秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起回事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設事業  
調査面積 3,700㎡  
現地調査 平成22年5月19日～11月26日  
調査担当者 渡辺和行（現場責任者）・池田透・後藤枝里子・高柳俊輔  
調査協力 東日本高速道路株式会社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 縄文時代・平安時代  
遺構 柱穴・土坑・<sup>おとしあな</sup>陥穴・溝跡・沼跡  
遺物 縄文土器・石器・須恵器・土師器・金属製品（文化財認定箱数：5箱）



図1 遺跡位置図(1:50,000)

## 調査の概要

沼田2遺跡は国道13号及びJR袖崎駅の西に位置している。遺跡の西に沢の目川が流れ、北に赤石・高玉地区がある。遺跡の周辺は田畑が広がり、沼田2遺跡も調査前まで畑地として利用されていた。今回、東北中央自動車道建設に伴って、遺跡の中央部を調査することとなった。

まず、遺構や遺物の検出状況を確認するためトレンチ調査を行った。その結果を受けて遺跡範囲の北側を面的に調査することとなった。

## 遺構

主に縄文時代と平安時代の遺構が検出された。縄文時



図2 溝跡遺物出土遺物出土状況

代の遺構として、<sup>おとしあな</sup>陥穴・土坑・ピットが検出されている。<sup>おとしあな</sup>陥穴（図4）は5基確認されており、いずれも逆茂木<sup>さかもぎ</sup>が設置されており、下層には火山灰と考えられる層が堆積していた。この火山灰に関して分析を委託しており、陥穴の年代を考える一助となることを期待している。ま

た、四角の壁に凹凸があり、何らかの構造物が設置されていた可能性がある。5基は列を成して調査区の北東端から南西側に向かって配置されている。その先には沼跡と考えられる遺構があり、水を飲みに来る動物たちを捕まえるために設置されていたのであろう。

沼跡と考えられる遺構の上面には火山灰が層として堆積していた。それが915年の十和田火山灰だとすればこの沼は1100年前には埋没していたといえる。火山灰層の下層から石錘せきすいが出土している。魚を捕るために使用し、破損したために捨てられた可能性が高い。

その他の土坑やピットについての詳しい用途は不明である。土坑の一部は貯蔵穴であった可能性がある。しかし検出面から遺構底面まで30 cm程度と一般的な貯蔵穴遺構と比べて浅く、確実なことはいえない。

それらの遺構から遺物が出土している。主に今から3000年～2500年前の縄文時代後期・晩期の土器だと考えられる。文様は縄目以外あまり見られず、粗製土器と呼ばれる煮炊きに使用されていた土器がほとんどといえよう。

平安時代の遺構として、溝跡（図2）が検出されている。調査区を東西に横断している状態で検出されており、西側にある沼跡との関連が考えられる。排水用の溝という可能性が高い。溝の底面に砂等の堆積物がないため緩やかな流れであったといえる。もしくは溝内の掃除を行っていた可能性もある。破片であるが多くの遺物が出土している。

その他に詳しい時代は不明ながら柱を抜き取った痕跡のある柱穴が検出されている。一部は前述の溝を切って掘られているため溝よりは新しい年代であることが伺える。しかし、それらは建物跡を構成することがなく単体で存在しており、用途についての検証を要する。

縄文時代や平安時代の遺構はいずれも調査区の北側に集中していた。南側にはあまり当該期の遺構が存在せず、近代の畑として利用された時の痕跡が多くみられた。

### 遺物

主として縄文土器（後期・晩期）や石器が出土しており、少量ながら早期から中期の土器も出土している。また、僅かながら須恵器の坏の口縁が出土している。この遺物が出土しているのは前述の溝からである。中世の遺物の出土はない。

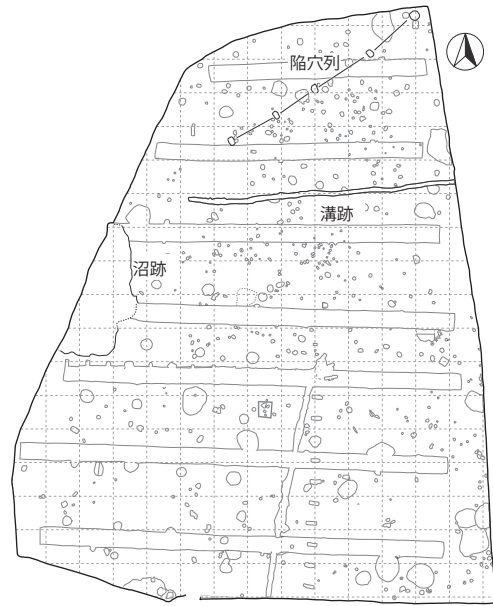


図3 遺構配置図（1/800）



図4 陥穴

### まとめ

今回の調査で当遺跡の土地利用の変遷が確認出来た。縄文時代の中でもおとしあな陥穴が存在した時期は森林であり沼跡周辺は石錘の出土も考慮すると狩猟場であったといえる。

後期・晩期には土器の出土状況も踏まえると集落の縁辺、もしくは何らかの作業場になっていたと考えられる。平安時代にも居住域から離れた場所であったとはいえ、溝が排水用だとすると東側に集落があった可能性が高い。その後、柱を必要とする施設が作られ近現代には農地として利用されていったことがみられた。

# はちごうだ 八合田遺跡

|       |                                      |
|-------|--------------------------------------|
| 遺跡番号  | 平成11年度登録                             |
| 調査回数  | 第1次                                  |
| 所在地   | 村山市大字土生田字八合田 2565-1 他                |
| 北緯・東経 | 北緯 38 度 33 分 06 秒・東経 140 度 23 分 21 秒 |
| 調査委託者 | 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所                |
| 起回事業  | 東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設事業                 |
| 調査面積  | 600 m <sup>2</sup>                   |
| 現地調査  | 平成22年9月8日～11月26日                     |
| 調査担当者 | 渡辺和行（現場責任者）・池田透・渡部裕司                 |
| 調査協力  | 東日本高速道路株式会社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所  |
| 遺跡種別  | 集落跡                                  |
| 時代    | 縄文時代                                 |
| 遺構    | 柱穴・土坑・溝跡                             |
| 遺物    | 縄文土器・石器（文化財認定箱数：1箱）                  |



図1 遺跡位置図(1:50,000)

## 調査の概要

はちごうだ  
八合田遺跡は JR 袖崎駅の北西に位置し、東に沢の目川が流れる。遺跡は低位段丘上にあり、周辺には水田やスイカ畑などが広がっている。東北中央自動車道建設に伴って、遺跡範囲の南端部を調査することとなった。

## 遺構と遺物

検出された遺構は全部で 100 基程で、ピットや不定形の土坑、さらに水が溜まっていたと考えられる溝状の落ち込み等がある。

遺構周辺から石鏃や縄文土器が出土していることから当該期の遺構が主であると考えられる。また、溝状の

落ち込みの底から縄文土器と考えられる土器片が出土していることから同様のことがいえる。土器は水の浸食を受け磨滅しており、文様自体は明確に確認出来ず、うっすらと縄目の痕跡が確認出来る程度である。破損などによって廃棄された可能性が高い。

柱穴も検出されている。しかし建物跡を構成していたかなどの検証はこれからである。

不定形の土坑については斜面の際に位置することから落ち込みの可能性が高い。ただし、円形の土色変化がみられ、覆土に細かい炭化物が多く含まれていたこと考慮すれば竪穴建物跡などの床面であった可能性もある。今後の検証課題といえる。

## まとめ

はちごうだ  
八合田遺跡における生活域は溝状の落ち込みに囲まれたやや標高の高い場所であったと考えられる。遺構や遺物もその場所から集中して検出されている。しかし、遺物の出土量や遺構の種別や数量からしても集落の中心とは考え難く、今回の調査区は集落の縁辺部にあたりとみられる。恐らく遺跡範囲の北側に中心となる集落が存在していたと考えられる。今後の調査に期待したい。

# もりはら 森の原遺跡

遺跡番号 NO. 639  
調査回数 第1次  
所在地 村山市土生田字鼠田  
北緯・東経 38度33分34秒・140度23分53秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起因事業 東北中央自動車道（東根～尾花沢間）  
調査面積 760㎡  
現地調査 平成22年10月4日～11月30日  
調査担当者 高橋 敏（現場責任者）・千田一志・佐藤智幸  
調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡  
時代 縄文時代・平安時代  
遺構 柱穴、溝跡、土坑  
遺物 縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器（文化財認定箱数：1箱）



図1 遺跡位置図（1：50,000）

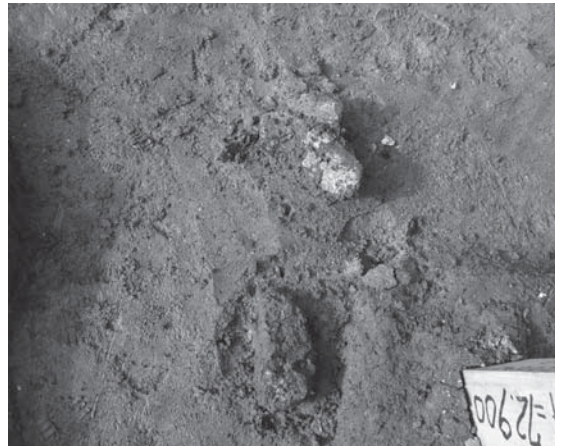


図2 縄文土器片出土状況

森の原遺跡は村山市北部の最上川右岸、JR袖崎駅の北方約1.4kmで、大石田ゴルフクラブの南側に広がる低地の自然堤防上に立地し、スイカやさくらんぼなどの畑地となっている。

今回の調査は、高速道路用地に沿って走る取り付け道路部分の調査である。このため調査区は高速道路予定地の東西両側に幅約5mの帯状に設定した。東側調査区からは溝状遺構や性格不明遺構のほかに、いくつかの柱穴が確認されている。いずれも遺物が出土せず、時期は不明である。西側調査区からは溝跡や柱穴、縄文土器細片

や炭化物を多く含む落ち込み状遺構が確認されている。また、柱穴の多くからは柱痕跡（アタリ）が確認できたが、調査区が狭いこともあって、建物跡を見つけることはできなかった。

遺物は表土掘削中に出土した少量の近現代の陶磁器と、遺構確認の際に出土した縄文土器片が主で、他に平安時代の須恵器片がごく少量出土している。いずれも小片で、特に縄文土器片は傷みが激しいものが多く、表面は剥離し紋様も確認しにくくなっている。石器は鉄石英製の石鏃や剥片が少量みられるだけである。

でっばりざかじょう  
出張坂城跡

遺跡番号 平成8年度登録  
調査回数 1次  
所在地 鶴岡市大字下清水字水尻  
北緯・東経 38度43分16秒・139度46分0秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所  
起因事業 国道7号鶴岡バイパス建設工事  
調査面積 600㎡  
現地調査 平成22年11月1日～11月30日  
調査担当者 福岡和彦（現場責任者）  
調査協力 鶴岡市教育委員会  
遺跡種別 城館跡  
時代 中世・近世  
遺構 <sup>くるわ</sup>郭跡



遺跡位置図（1：25,000）

### 調査の概要

出張坂城跡は、森山から庄内平野に突き出た標高20～40mの丘陵上に築かれた平山城である。西麓を越後街道が走り、そこに「あら町」「そり町」「堀の内」「堀の外」という地名が残る。この城跡の南側にある山城の栗館と一体になって、<sup>しみず</sup>妙味水城と総称された。昭和33年の国道7号の開削、昭和44年の鉄工団地の造成によって城のほとんどが消滅し、国道沿いの切り通しの上が現存する唯一の地表面遺構である。

この度、現在建設中の日本海沿岸東北自動車道に繋が

る国道7号鶴岡バイパスの拡幅工事に伴い、緊急発掘調査が行われることになった。22年度は城跡の構造や形状を調べるため、現在残っている地形の測量作業を行った。この調査をもとに、来年度継続して遺構精査などの詳しい発掘調査を実施する予定である。



調査区全景（北西から）

# さくの 作野遺跡

|       |  |
|-------|--|
| 遺跡番号  | N o.655                                |
| 調査回数  | 第3次                                    |
| 所在地   | 村山市大字楯岡字笛田                             |
| 北緯・東経 | 38度28分34秒・140度24分13秒                   |
| 調査委託者 | 村山市                                    |
| 起因事業  | 徳内・シーボルトライン道路改良事業                      |
| 調査面積  | 250㎡                                   |
| 現地調査  | 平成22年7月5日～8月4日                         |
| 調査担当者 | 植松暁彦（現場責任者）・後藤枝里子                      |
| 調査協力  | 村山市教育委員会・村山教育事務所                       |
| 遺跡種別  | 集落跡                                    |
| 時代    | 縄文時代                                   |
| 遺構    | 土坑・柱穴・溝跡・谷跡等                           |
| 遺物    | 縄文土器・石器・土偶・石棒・石刀・土冠・勾玉・玉等（文化財認定箱数：60箱） |



遺跡位置図（1：50,000）

## 調査の概要

作野遺跡は、大沢川左岸の扇状地扇頂部に位置し、地元周辺においては、古くから土器や石器が採集される地域として知られ、昭和53年（1978年）に正式に遺跡として『山形県遺跡地図』に登録された。

その後、山形大学が、昭和54年（1979年）に宅地造成などに伴いトレンチによる発掘調査を実施し、竪穴住居跡2棟や多量の遺物を発見した。更に、県教育委員会において、昭和57・58年（1982・1983年）に県企業局の送水管工事に伴う面的調査（第1次調査）を行い、

竪穴住居跡2棟と、多量の土器さらに石器を廃棄した「捨場」を発掘した。

これらの成果から、本遺跡は縄文時代終末の縄文時代後期～晩期（約3,000年前）の当地域の拠点的な集落跡として報告され注目された。

平成21年（2009年）に、村山市の市道徳内・シーボルトライン道路改良事業に伴い村山市の委託を受け発掘調査（第2次調査）が行われた。調査区は、第1次調査の東側にほぼ並行する範囲で、遺跡範囲の最も東側の山際に位置し、標高が高く扇状地の最頂部付近にあたる。調査では、縄文時代後・晩期の貯蔵穴群、縄文時代最終末～弥生時代初頭の竪穴住居跡1棟が発見された。遺物は、縄文時代～弥生時代初頭の土器や石器などが多量に出土し、土偶や石棒・石刀、石冠など祭祀具も出土した。

特に縄文時代最終末～弥生時代初頭（約2,300年前）の竪穴住居跡は、県内でも発見例が少なく、出土遺物からは他地域の影響も考えられる土器や石製品も出土し、弥生文化の始まりを知る上で貴重な資料が得られている。

今回の調査は、昨年度の市道徳内・シーボルトライン道路改良事業に付設される市道工事（第3次調査）に伴い、第1次調査の西側にあたる部分の発掘調査を行った。



調査区は、幅約8m×長さ約33mと小規模ながら、調査区南部で縄文時代晩期中～後葉（約2,500年前）の谷跡、調査区中央部～北部の岸辺で同時期の大型の柱穴や土坑、溝跡などが発見された。

特に谷跡からは、多量の縄文土器や石器が出土し、他に祭祀具の土偶や石刀、石棒、土冠、装飾品のヒスイ製の玉など多様な遺物が出土した。また、これら遺物は、谷底から徐々に堆積した大別4層の地層ごとに出土し注目された。

### 遺構と遺物

作野遺跡は、従来の調査から縄文時代終末～弥生時代初頭（約3,000年～約2,300年前）にわたり、長期間営まれた県内でも有数の拠点集落と知られている。

特に谷跡は、幅約4m以上、長さ約6m以上、深さは遺構検出面から約1.5mを測る。東の山裾から西流したことが分かる。

この谷跡からは、洪水などによる堆積土が大別4層（上層・中層・下層・最下層）に分けられ、多量の土器や石器、多様な土偶や石棒・石刀、土冠などの祭祀具、玉類など装飾品が出土した。

これらを古い順に概観すれば、谷底（砂礫）に近い最下層（F4層）では、水の流れが推測される砂を含む泥炭層で、土器が一定量出土し、大半が半完形品であった。

その上層（F3層）は、シルト層が最も厚く堆積し、遺物が最も多く出土した。大型の深鉢や鉢が横位・逆位した状態で出土し、当時の廃棄された状況がよく分かり、ほぼ完形品に復元されるものが多く認められた。また、小型の壺や鉢、赤彩された土器などもまとめて出土した。他に土偶や、男性器を模した柄がある石棒や石刀が数10点出土した。男女両性具を表現したとされる土製の突起を有する冠形の土冠（どかん）なども出土した。

中層（F2層）は、下層に比べ遺物量は少ないものの、小～中型の完形の鉢などが複数発見された。新潟県上越市の糸魚川産と考えられるヒスイ製の玉も中～下層からの出土である。なお谷跡は、中層の堆積によりほぼ埋没し、窪地状の低地となっていたようである。

最も上位の上層（F1層）は、砂層で遺物量は全体的に少ない。但し、完形品の注口土器や浅鉢などが散見され窪地状になった谷跡にひきつづき遺物を廃棄していったことがうかがえた。



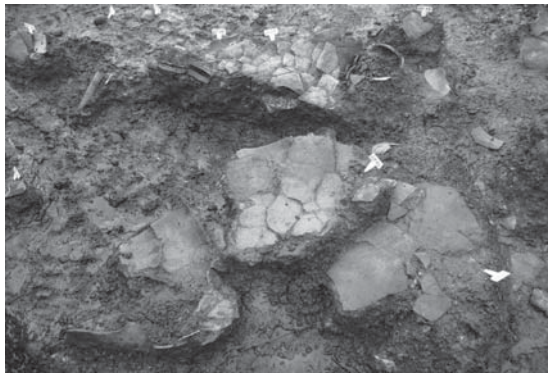
SG1谷跡の下層の掘り下げ作業風景（南から）＊写真手前に土器群が集中出土



調査区全景（南から）＊写真手前がSG1谷跡



SG1谷跡の上層の掘り下げ作業（南から）



SG1谷跡の下層の遺物出土状況（南から）



SG1谷跡の最下層の遺物出土状況（南から）＊調査説明会

これら出土遺物のうち、文様のある精巧な造作のいわゆる精製土器から年代が推定され、全体に縄文時代晩期の時期と考えられた。さらにこれらは、文様構成から東北地方南部の当該期の標識土器型式である岩手県大洞貝塚に類する大洞式段階と考えられ、晩期中葉の大洞C1式～C2式、同後葉の大洞A式頃のものとして判断された。

全体的には、最下層が大洞C1式～C2式、下層～中層がC2式、上層がC2式～A式頃と推測された。

これは、当地域の縄文時代終末期から弥生時代初頭への移行を考える上で、貴重な資料と考えられる。

一方、谷北側の岸辺（平場）では、岸から約10mは遺構が希薄だが、その北側に直径約1m前後の土坑が集中し、更に北側には建物を構成すると考えられる大型柱穴が確認されている。また、今調査区の北西を昭和54年に山形大学が調査した際に同時期の竪穴住居跡が確認されている。こうした遺跡分布から、集落の主体は今調査区の北側に存在し、南北約200mの大規模な集落だったと考えられる。また、多量の遺物が出土した谷跡は集落の南縁辺にあたり、その出土品の様相から廃棄場や祭祀場などに利用されたものと考えられる。

### まとめ

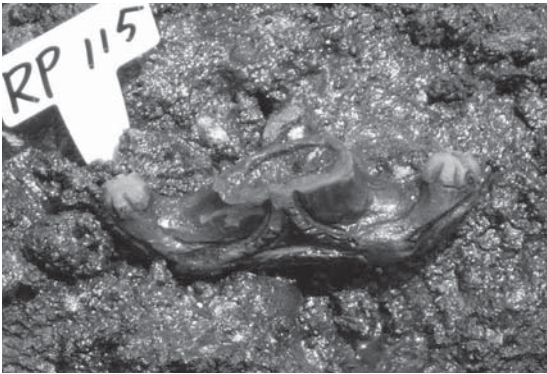
今調査は、小規模な調査範囲であったが、調査区南側には深さ約1.5mの谷跡が発見され、堆積土の各層ごとに縄文時代晩期中～後葉の多量の土器や石器、多様な祭祀品、装飾品が出土した。これは、第1次調査の「捨て場」から発見された出土品とも時期的に合致し関連性がうかがえる。また、昨年度の第2次調査で発見された、県内では数少ない弥生時代初頭の土器群に繋がる時期のものでもある。今後これらを詳細に比較検討することで、県内及びその周辺地域の縄文時代終末から次代弥生時代へ移行する過渡期の様相を知ることができよう。特に今調査で出土した県内で数少ない新潟県糸魚川産のヒスイ製玉類は、本遺跡が当地域の求心力のある拠点集落で、縄文時代終末から他地域と積極的な交流が盛んであったことがうかがえる。これは、「米どころ山形」として知られる本県の稲作文化がどのような経路や経緯を辿って流入したかを考える上でも貴重な資料である。



SG1 谷跡の中層の縄文土器（渦巻状の文様の浅鉢）



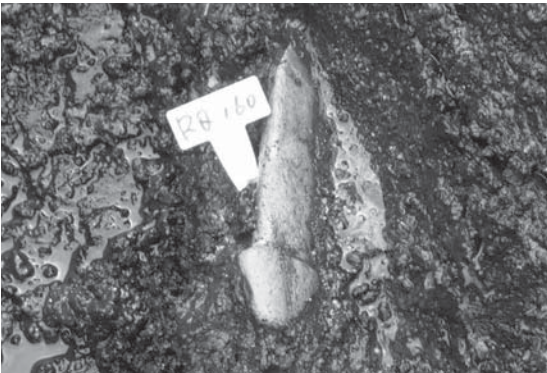
SG1 谷跡の下層の縄文土器（突起のある大型皿の内側）



土偶の出土状況（胸部と両腕部。頭部欠損）



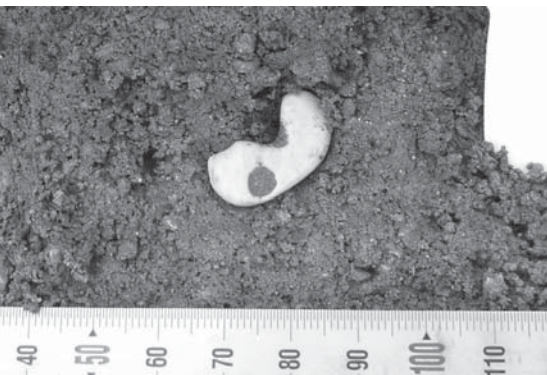
土冠（どかん）の出土状況



石刀（突起部がくびれる男性器を模倣した柄部）



石刀（突起部がくびれない柄部）



新潟県糸魚川産と考えられるヒスイ製の勾玉（まがたま）



新潟県糸魚川産のヒスイ製の玉

## 2. 普及啓発等業務

### (1) 研修等

#### ① 全国埋蔵文化財法人連絡協議会事業への派遣

##### ア 総会

期 日 平成22年6月10日～6月11日

会 場 愛知県犬山市（国際観光センター）

派遣職員 総務課長 鎌上勝則、整理課長 安部実、課長補佐 伊藤邦弘

##### イ 役員会

期 日 平成22年5月20日～5月21日

会 場 和歌山県伊都郡（高野山大学）・高野町（高野山）

派遣職員 専務理事 柏倉俊夫

##### ウ 研修

研修名 全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修

期 日 平成22年12月8日～12月13日

研修地 中華人民共和国

派遣職員 調査課長 阿部明彦

##### エ ブロック活動

北海道・東北地区会議並びに同北海道・東北地区コンピュータ等研究委員会

期 日 平成22年10月14日～10月15日

会 場 岩手県盛岡市（南部湯守の宿大観）

派遣職員 調査課長 阿部明彦、専門調査研究員 小林圭一

調査研究員 高桑登

#### ② 埋蔵文化財担当者専門研修への派遣

##### ア 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会

期 日 平成22年11月11日～11月12日

会 場 徳島県立総合教育センター

派遣職員 課長補佐 黒坂雅人

##### イ 報告書作成過程

期 日 平成22年11月17日～11月20日

会 場 奈良文化財研究所

派遣職員 調査研究員 草野潤平

##### ウ 自然科学的年代決定法課程

期 日 平成22年11月28日～12月3日

会 場 奈良文化財研究所

派遣職員 主任調査研究員 菅原哲文

##### エ 出土文字資料調査課程

期 日 平成23年1月16日～1月21日

会 場 奈良文化財研究所

派遣職員 主任調査研究員 植松暁彦

### (2) 情報処理

収蔵図書データベース

新収蔵図書 2,555冊のデータ入力実施（File Maker Pro使用）

## (4) 調査研究発表

### 土器片が集中した理由

—村山市東熊野苗畑遺跡で発見された土器集中部から見える古代の生活の様子—

大場正善・濱松優介

#### I はじめに

村山市の北東部、山形盆地と尾花沢盆地との境界付近の、最上川の三難所の一つ、「隼の瀬」の東側に位置する東熊野苗畑遺跡では、調査区の東西を流れていた河川跡の付近で、土師器 186 点、須恵器片 86 点、石・石製品 10 点、木製品 1 点が約 5m の範囲で分布する“土器集中部”が発見された(図 1: pp.39 ~ 42 を参照)。そのような土器片の集中する分布を見て、わたしたちは、「なぜここに、土器片が集中して分布しているのか?」と、素朴に疑問を持つであろう。ある人は即座に「捨て場」であるとか、「流されてきたモノが溜まった」とか、はたまた「儀礼を行った場」とか、いろいろと「解釈」を与えるかもしれない。「解釈」を与えて、その土器集中部の意味が決まることもあろう。しかし、それらの「解釈」は、あくまでも検証すべき「仮説」に過ぎないのである(Binford 1977、山中 2007)。実際にはどうであったのか。遺物が散らばった当時の様子を見ることは不可能なので、その真相は「判らない」。では、本当に「判らない」のか。真相に迫ることはできないのか。

本稿は、そんな素朴な疑問にたいしてアプローチしたものである。延いては、土器集中部が形成された背景、すなわち土器集中部の形成に絡んでいたヒトの姿(動作連鎖)を復原し、民族誌学的に記録することを目的として調査を行い、その分析結果を報告したものである(ルロフ = グーラン 1973、山中 2004)。なお、分析に当たっては、土器の破損状況と土器片の分布状況の仔細な法科学的分析から、河川の傍を液体の入った土器を運搬している途中で、土器が落下して破損し、破片が散らばった、と解釈した富井真氏の分析が参考となる(富井 2006)。

#### II 土器集中部について

##### (1) 土器集中部の保存状態

土器集中部の分析に先立ち、まず検討しなくてはならないのは、土器集中部の保存状態である。そこでここでは、その保存状態について検討を行う。

**東熊野苗畑遺跡で検出された河川跡** 土器集中部が検出された地点は、調査区南区内を東西に蛇行して横断する幅 6 ~ 10m の河川跡の東側左岸側に当たる(p.40 の図 4 を参照)。その河川跡の平面プランでは、4 本程度の流路跡が認められた(p.40 の図 3 を参照: 註 1)。また、河川跡の土層観察を目的とした A ~ E トレンチの断面観察では、流水を示す砂層と止水し湿地状態であったことを示す泥層が、交互に堆積していることが認められた(図 2・3、表 1)。さらに、河川跡底面では、多条の流路跡が認められ、かつそれらが重複し、複雑に絡み合っていることが判った。つまり、本遺跡の河川跡は、蛇行した流路に一定期間流水したのちに、泥が堆積して止水し、湿地となった。そして、何らかの自然要因によって再び流水し、経路が若干異なる新たな流路を作った。こうした流水と止水、そして新たな流路の形成を、幾度となく繰り返した結果、形成されたと言えよう。

**土器集中部周辺の地形** 土器集中部が発見されたのは、古い段階で埋没し、堆積土が硬化している流路跡と、それとよりも新しい段階で埋没した、幅 2 m 程度の細い流路跡である。古い段階の流路跡上面(22 層上面)は、硬く締まっており、土器片もそれより下位から出土しないことから、新しい流路跡に水が流れていた頃は、“岸边”であったと考えられる。とくに、その岸边から出土したものが多く(図 4)。

土器集中部が形成されたのちは、層厚約 10 cm の遺物包含層である 14 層が堆積し、さらにその上に古代以降



図1 土器集中部遠景 (西から)



図2 Eトレンチ東壁セクション (西から)

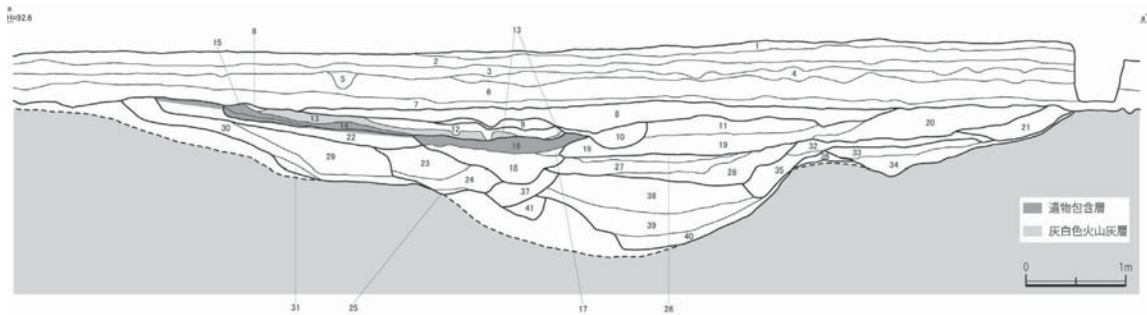


図3 Eトレンチ東壁セクション図

表1 Eトレンチ土層注記 (土器集中部周辺のみ記載)

9層：7.5YR4/2 灰黄褐色細砂とシルトの互層  
 10層：7.5YR2/1 黒色細砂とシルトの互層  
 12層：7.5YR4/1 褐灰色シルト層  
 13層：7.5YR6/2 灰褐色シルト層 (火山灰層)  
 14層：7.5YR2/1 黒色シルト層  
 15層：10YR6/4 にぶい黄橙色細砂混じり粘土層  
 16層：2.5Y2/1 微量の細砂が混じる黒色粘土層  
 17層：7.5YR2/1 微量の細砂が混じる黒色粘土層

18層：10YR3/2 微量の細砂が混じる黒色粘土層  
 22層：10YR2/2 微量の細砂が混じる黒褐色シルト層  
 23層：10YR5/2 灰黄褐色粘土と細砂の互層  
 24層：10YR2/1 黒色細砂と粘土の互層  
 29層：7.5YR1.7/1 黒色細砂混じりシルト層  
 30層：7.5YR3/1 黒褐色細砂混じりシルト層  
 31層：7.5YR4/1 褐灰色細砂層

灰したと考えられる13層の火山灰層(註2)が堆積。さらにその後、幅1m前後の流路跡(図3の10層)が、火山灰降灰以前の流路跡の南半分を開析する。その後の流路の痕跡は、認められなかった。

なお、土器集中部の西側は、試掘調査時に設定したトレンチ(Eトレンチ)によって、削平を受けている(p.40の図4を参照)。また、土器集中部の東側は未発掘区であるが、調査区の東端から1m程度行くと、溜め池造成によって大きく削平されている。

**火山灰層** 河川跡を覆う火山灰層中には、水が流れていたことを示す砂や円礫の混入が認められないため、火山灰層は、ほぼ火山灰のみで構成される一次堆積層であると考えられる。また火山灰層上面などには、後世の耕作などによる土地改変の痕跡も認められない。つまり土器集中部周辺は、火山灰の堆積後、流路跡の一部以外、とくに目立った堆積上の動きはなかったと考えられる。

ただし、近年造成された農道に近い土器集中部の北端は、削平を受けている可能性がある(p.40の図4を参

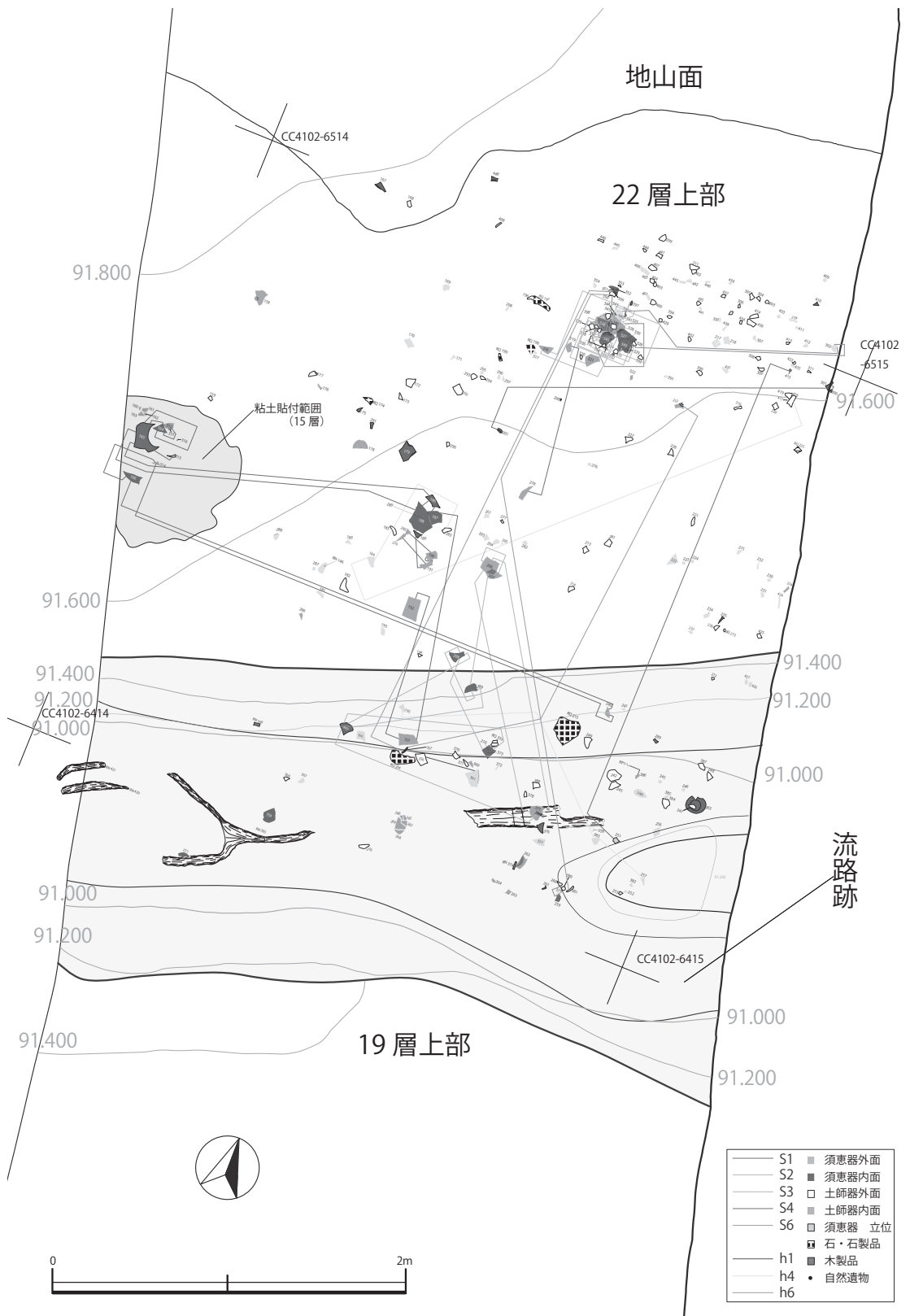


図4 土器集中部の出土状況、および土器片の破断面接合関係平面図

照)。

**土器集中部が包含されていた層位から** 土器集中部の出土層位は、火山灰層(13層)の直下の層厚約10cmの黒色と黒褐色シルト層の14層と22層上面、そして流路跡内の黒色粘土層の16層である(図3)。生活面が、22層上面であったと考えられる。調査では、14層において流水を示す砂礫をほとんど確認することがなかった。土器片そのものにも、転磨を示すような磨滅痕が認められない(図5～6)。つまり、14層の堆積土と土器集中部の土器片は、流水によって堆積したものではないと考えられる。上述したように、土器集中部は、当時水が流れていない「岸辺」に分布していた、と言える。

一方で、流路跡内の16層は、水分の多く粘性の強い粘土、いわゆる「泥層」である。この層順は、微量な細砂が混じる程度で、ほとんど粘土が主体であった。16層出土の土器片にも、転磨痕を認められなかった(図7～9で示した土器片の一部)。さらに、16層出土の土器片の分布は、個体別、そして接合関係において、岸辺出土の土器片の分布と隣接していることから、16層出土の土器片が「流された」とは考え難い(図4・14)。もし、16層出土の土器が「流された」のであるならば、岸辺出土の分布と隣接することがないはずである。つまり流路跡とは言え、16層段階では止水し、湿地状態であったことが考えられるのである。

したがって、当時、河川跡には止水した流路跡上に形成した湿地があり、土器集中部は、この湿地と旧来の岸辺に形成した、ということが考えられよう。水の影響は、ほとんど無かったと言える。

**原位置を動いていない** 岸辺出土の土器片の出土状況は、ほとんどが表裏面を層順の走向と並行であり、直立しているものがごくわずかに過ぎない(図1・4・13)。また、個々の土器片には、鉄製農具と接触した際にできるような引っ掻き傷やその傷に重複する褐鉄、いわゆる“ガジリ”(菊池2001)も認められない。つまり、土器集中部の土器片は、耕作や造成で攪拌されたことがなく、ごく“自然の状態”、すなわち土器片が分布した当時の状態を保っていると考えられる。

16層出土の土器片は、たとえばRP265～269(個体No.S5:図4)のように、坏の底部が垂直方向になった状態で出土している。ほかにもRP251、381が長軸

を垂直方向になった状態で出土したように、16層が泥層であることから、土器片の自重で沈下して行ったことが考えられる。上述したように、16層段階では、流水があったことが確認できないので、土器片が下流方向へと流された可能性は低い。土器片が16層上面、すなわち湿地表面に着地したのち、垂直方向への移動はあったものの、水平方向への移動は、ほとんどなかったと考えられる。

**小結** 以上のことから、東熊野苗畑遺跡で見つかった土器集中部は、22層上面を中心に形成されたのち、大きな移動をすることなく、そしてまもなく14層が堆積。14層の層厚を考慮しても、あまり時間を置かず、火山灰層に覆われたことが考えられる。言い換えれば、土器集中部の土器片は、放置された当時の状態を保ったまま、火山灰でパッキングされたことが言えよう。

## (2) 土器片の分布状況から—須恵器を中心に—

東熊野苗畑遺跡の調査では、土器集中部の土器片にたいして、土器片の輪郭や天井を向いている内外面の向きについて、平面図上に仔細に記録を残した(図4)。それは、平面図上で土器集中部の土器片の出土状況を復原すること、平面図上で破断面同士の接合関係を検討することを目的としている(Leroi-Gourhan 1950)。ここでは、ドットによる個体ごとの分布図(図14)での検討と合わせて、土器集中部における土器片の分布状況について検討を行う。とくに、比較的硬質であるため、保存が良好な須恵器を中心に分析を行っている。また、須恵器片の破断面の観察では、試みの破損実験や、動作連鎖の概念に基づく石器技術学(Tixier 1967など)や、破壊力学における脆性素材の破損解析(Fréchette 1997、吉田2005)での知見を参照している。

### A 土器片自体の状態

**ピースが足りない** 土器集中部で出土した須恵器は、大形の甕(S1～2)、甕?(S3・S9・S20～S21)、坏(S4～S5・S7～S8・S10～S11・S13・S15～S19)、高台付き坏(S14・S22)、坏蓋(S6・S12)である。接合作業によって、多くの個体が完形のうちの10%から30%程度しか復原出来ないことが判明した(図5～9)。しかも坏S8(図9)は3片あるものの、接合しないし、



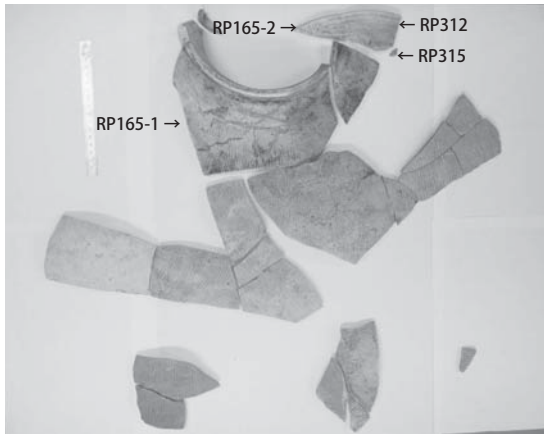


図5 大型の甕 S1 の接合状態（外面が表）

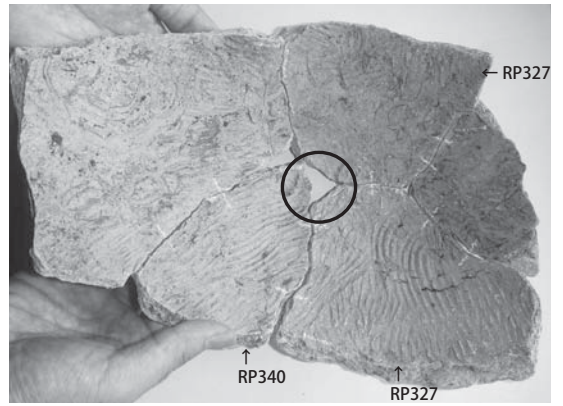


図6 大形の甕 S2 の接合状態（丸杵内が空白部：内面が表）

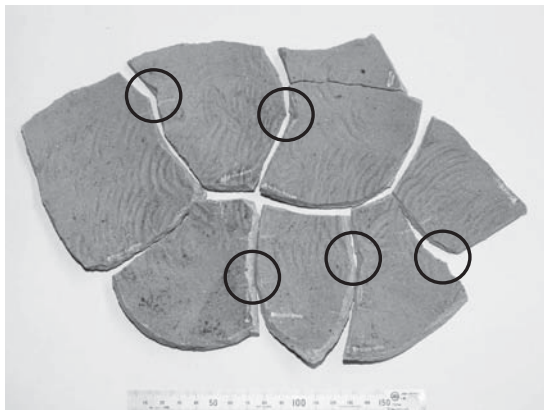


図7 甕 S3 の接合状態（丸杵内が打点：内面が表）

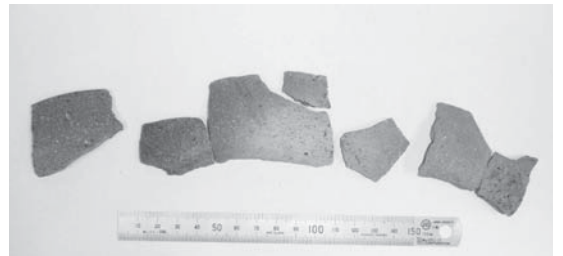


図8 罎 S4 の接合状態（外面が表）

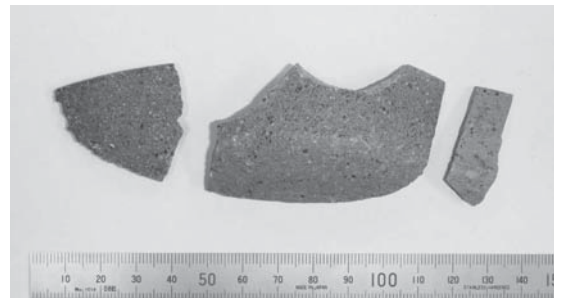


図9 罎 S8 の接合状態（外面が表）

S10～S13・S15～S22は、1片のみで構成されるということも判った。つまり今回検出した土器集中部で出土した土器片のすべてを接合しても、それぞれの個体は完形に戻らないということが判った。未発掘区に、まだ未発見の残りの土器片が存在している可能性もあるが、少なくとも径約4.5mの範囲から出土した土器片を組み合わせても、1つも完形の土器に復原できないのである。

なお土師器についても同様で、個体数が11数えるものの、完形に戻るくらいに接合する個体は、1つもない。

**S2に残る痕跡** 大形の甕であるS2は、S2を構成する5点を接合すると長軸約25cm、短軸約15cmの、大きな長方形の破片になる（図6）。さらに、その中心付近には、空白部分が認められる。空白部を埋める土器片については、今回の調査では見つかっていない。その空白部分の破断面を観察すると、内面から外面に向けての円錐状の割れ、すなわち“剥離面”が拡がっていることが判る（図12）。また、空白部を中心にして割れが進行し

ており、大きな破片を5つに分断した、と言えよう。

**打撃の痕跡** 基本的に、床の上に置いた陶器片などの中心部、すなわち広い面の中心に打撃を加えると、板ガラスに打撃を加えた際に類似するのであるが、打撃部付近は強い衝撃によって碎け、細かな破片が生じる（図10・11）。さらに、その打撃部を中心にして、多条の亀裂が放射状に走り、さら横方向などに分岐したりする。“カットピザ状の破片”が生じるのが、打撃した際の1つの特徴と言える。胎土が細粒で緻密な場合は、亀裂が多く発達するため、破片の数が増える傾向がある。また、硬石などの硬質ハンマーで打撃した場合は、破片数も多く、破片が小さい（図11）。木などの軟質の有機質



図10 カン製棒状ハンマーで打撃した皿  
(右は打撃部直下の碎片：床に置いて裏面を打撃)

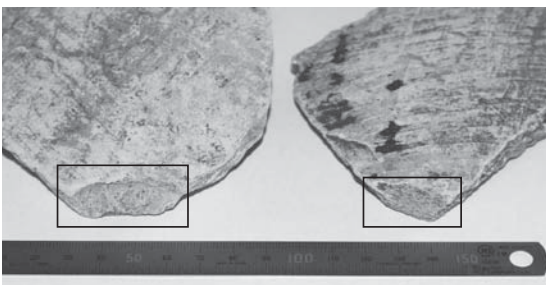


図12 S2の空白部に残る剥離面  
(四角枠内が剥離面：左が RP346、右が RP327)



図11 硬石製ハンマーで打撃した皿を打撃した直後  
(床に置いて裏面を打撃)



図13 土器集中部北側中央部での土器片の出土状況  
(南より、斜め方向から)

ハンマーで打撃した場合は、破片数が少なく、破片が大きい傾向と言える(図10)。これは、少なくともハンマーの質と重さから生じる、衝撃力の強弱が起因していると考えられる。

須恵器の破損実験については、今後の課題としたいが、類似した傾向となることが予想される。ただし、胎土の粒子の大きさと密度、硬化の度合い、輪積みなどの成形時における胎土接合部分が、亀裂の進行に影響を与えらると思われる。とくに、胎土の接合部分は、亀裂を引き延ばす潜在的な“目”の役割を果たし、この“目”に打撃が加われば、打点や打撃部が生じずに割れが進行したりする、と思われる。

**打ち割られた S2** は、粗粒でやや粗密な胎土であるが、空白部と亀裂が放射状に拡がっていることから、打撃された痕跡と同様の傾向と言えよう(図6)。空白部の破断面の観察からすれば、打撃は内面側から加えられ、打撃部を中心に亀裂が拡がり、5つの破片に分断したこと

が考えられる。とくに RP340 は、三角形になっており、打撃されたことを示す1つの証拠となる(図6)。S2を構成する点数、そして土器片の大きさを考慮すれば、床や地面等に置いた上で、有機質ハンマーによって打撃されたと思われる。S2以外では、やや細粒で、かつより硬質で、8点で構成される甕S3も同様に、接合すると大きな破片になる個体であるが、6ヶ所で打点が認められる(図7)。坏蓋S6も割られた痕跡が認められる。

なお、5点で構成されるS2の長方形の大きな破片が、どのように形成したのかについては、今後の課題としたい。また、ほとんどの土師器には、煤や二次焼成の痕跡が目立ち、劣化が著しく、保存状態が良くないので、打撃痕跡を追跡するのが困難であった。

## B 土器片の分布状態

**分布の粗密** 径約4.5mの範囲に土器が分布する土器集中部では、集中部の部分によって土器片分布粗密の

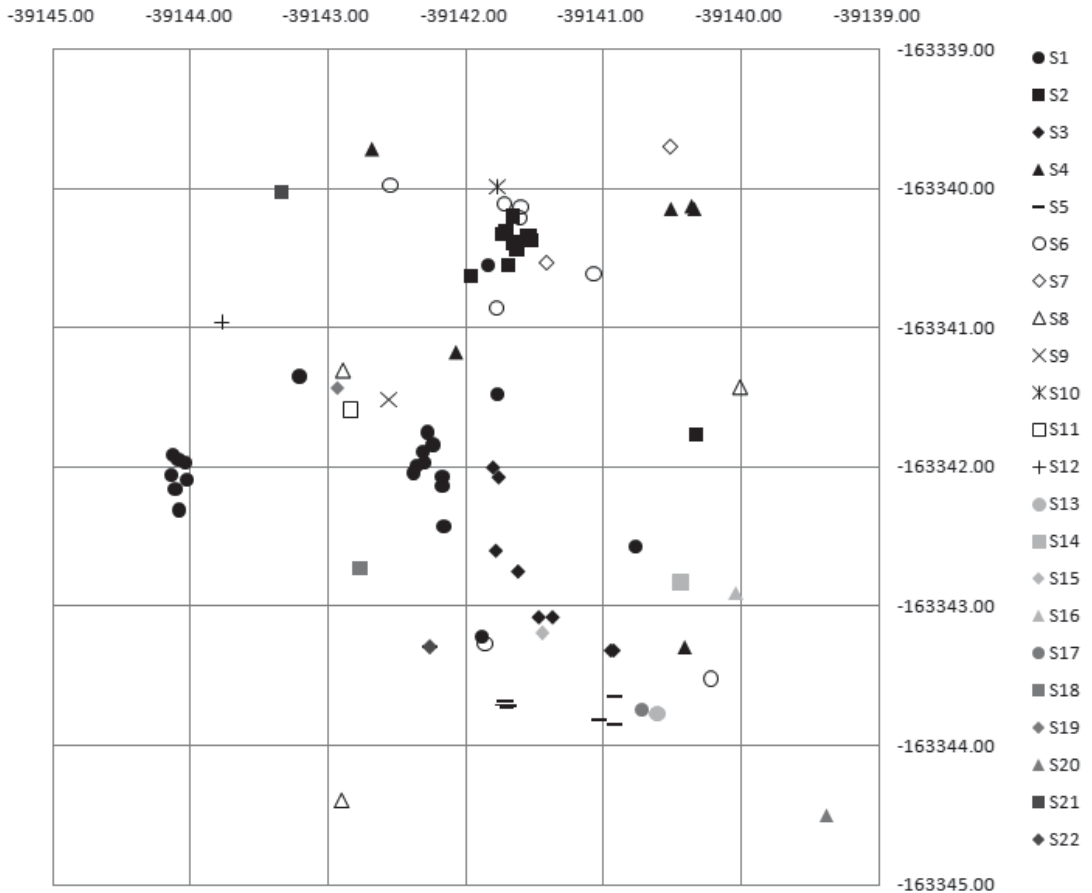


図 14 土器集中部における須恵器の個別平面分布図

偏りがある (図 4)。密度が濃いのは北側で、北側中央約 50cm の狭い範囲で、大きさの異なる土師器片 18 点と須恵器片 11 点が出土している。さらにその東側には、土師器片が多く分布する。それ以外の範囲では、まばらな分布で、5ヶ所 (RP188・289、RP206・207、RP247・363、RP210・373、RP362・375) で土器片が折り重なっている程度である。空白域も認められる。全体的には、東側と中央、そして流路跡内で、遺物の点数がやや多い傾向が言える。

**混じり合う個体** 個体ごとの分布状況については、個体ごとの分布状況を分かり易くするために、個体ごとに付した記号で簡略化し、ドット図にして示した (図 14)。そのドット図からは、須恵器の個体 S1 が東側と中央寄り、S2 が北側中央で、S6 が同じく北側中央で集中し、S3 と S5 が南側で多く分布していることが判る。しかし、どの個体も一か所のみには集中することはなく、分散傾向を示している。

**折り重なっている** 上述したように、土器集中部の北側中央では、計 29 点の土器片が密集している。実際には、土器片が密に折り重なった出土状態であった (図 13)。土器片と土器片の間には、ほとんど土が流入してなく、まさに土器片の上に土器片が重なっている状態である。

この北側中央では、とくに甕 S2 が集中している。上述したように、S2 は“打ち割られた”可能性が高い個体である。実際に、大形の破片を地面に置いて、その中心部を打ち割った場合、分断した破片は、打撃した瞬間に飛び散り、四方に分散していく (図 11)。有機質ハンマーを使った場合は、より遠くに分散する傾向がある (註 3)。となると、S2 の出土状況は、打撃した直後の状況とはまったく異なっている。もし、土器集中部の北側中央で S2 を打ち割っていたのなら、土器片が折り重なっている出土状況は、不自然であると言わざるを得ない。

**他所での打ち割り** つまり、S2 は、土器集中部の北側中央で割られたものではなく、土器集中部以外の場所で

割られたことが考えられる。上述の S2 の打撃点付近の空白部を埋めるピース、すなわち打撃部直下にできる多くの碎片が、土器集中部では発見されていないことも、それを示すもう一つの状況証拠となる。また、接合する各個体の破断面同士の接合線を図で示すと、接合線が土器集中部のなかで非常に入り組んでいることが判る(図 4)。その場で割れていれば、破断面同士が近接し、かつ破断面が向かい合った接合関係が多くなると思われる(図 11 を参照)が、そうした状況はあまり見られない。したがって破断面の接合関係からも、これらのことから、土器が他所で打ち割られたことを示していると考えられる。また、各個体が混じり合った分布を示していることも、傍証の一つとなる。

**例外** ただし、例外もある。土器集中部の西側で出土した、大形の甕 S1 (図 5) 口縁部(口縁部の約 1/2 が残存)である RP165-1 は、内面が天を向き、口縁部が張り付けられた粘土(15 層)に突き刺さった状態で出土した(図 1 の手前、図 4)。RP165-2 は、その S2 の口縁部で、打撃によって分断しているものの、本来の口縁部の位置を留めて出土した。また、RP165-1 と RP165-2 につながる RP164 と RP312、RP315 は、RP165-1 と接合する破断面と近接して出土した。とくに、RP315 は、長軸 1.5 cm 程度の碎片であり、この碎片が接合する RP312 の下から出土している。また、ヘルツ型の割れ面を確認することができる。これらの状況から、S1 の口縁部は、張り付けられた粘土に埋められたのちに、一部分に打撃が加えられた可能性があることが考えられる。しかし、なぜ、そうした行為が行われたのかについては、今回の調査では明らかにできなかった。

なお、流路跡から出土した坏 S5 の RP265 ~ 269 は、坏本来の形に近い状態で出土しており、かつ打ち割った痕跡が認められないことから、土圧によって割れた可能性が考えられる。

### (3) 土器集中部形成の背景

**状況証拠** 以上の状況証拠を整理すると、①土器集中部が形成されていた当時は、河川跡には流路が無くなり、泥層が堆積した湿地であった。②土器集中部は、旧来の岸辺と湿地に分布した。③土器集中部は、形成後、若干の時間を置いて、古代に降灰した火山灰層によってパツ

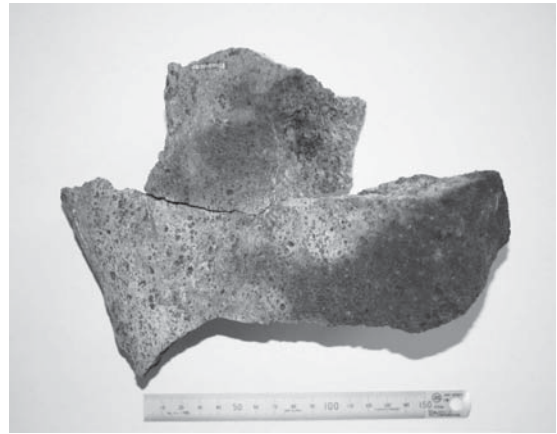


図 15 被熱痕跡を留める分割された安山岩礫 (上が RQ359、下が RQ254)

クされていた。④土器集中部の土器片は、土器片が分布した以降、ほとんど移動しなかった。⑤土器片の集中の密度に粗密があり、かつ空白域も認められた。⑥土器集中部から出土した土器片を接合しても、完形には戻らなかった。⑦大形の破片を、さらに有機質ハンマー?で打ち割っていた。⑧打ち割った場所は、土器集中部とは違う場所であった。⑨各個体の土器片が、混じり合い、かつ同一個体でも破断面同士の接合関係が入り組んだ状態で分布していた。

**考えられる背景** これらの状況証拠からは、土器集中部が形成した背景は、“他所で複数の個体の土器を打ち割り、複数の個体が混じった土器片を小分けにまとめて、複数回に分けて湿地周辺に捨てた”、という当時の廃棄を行うヒトの姿が考えられる。土器集中部の範囲には、上部が欠損した楔状木製品 RN369 や、分割され、かつ被熱した安山岩 RQ254 と 359 (ともに接合：図 15)、擦痕を有する大形礫 RQ215 も含まれる。上述したように、土器片は、二次焼成を受けた痕跡が見られ、使用された頻度が高かったことが考えられる。つまり、土器集中部は、使用を終えた土器や木製品などの生活用具を、いわば“ゴミ”として湿地に捨てた結果、形成された可能性が考えられる。しかも、遺物集中の密度の違いから、まとめたゴミを“投げ捨てる”や“足元近くに落とすように捨てる”などの、捨て方の違いが想定される(註 4)。ただし、土器集中部の西側、特に S1 が分布していた付近は、廃棄とは異なる行動が想定される。

生活の場であったと思われる竪穴状遺構 ST10 が、調



図1.6 高台付き杯 S14  
(RP1 と RP386 の接合状態：右端の破片が RP386)

査区北区の東寄り、土器集中部の北側で発見されている (p.40 の図 4 を参照)。その ST10 と土器集中部出土の土器片との接合作業を試みたが、残念ながら、接合関係は認められなかった。また、ST10 において、打ち割りを行ったような痕跡を認めることもできなかった。したがって、ST10 と土器集中部との直接的な関係は、不明なままである。土器集中部を形成した“ゴミ”を排出した場や打ち割りを行った場は、未発掘区に存在する、あるいは後世の土地改変によって破壊されていることが考えられる。

**打ち割りの意味** S2 のように、いくつかの個体には、打ち割りを示す痕跡が認められた。単純に考えて、捨てるのならば大形の破片の状態ですての方が、より合理的であると思われるが、事実としては、そうではないのである。打ち割られた須恵器片の大きさは、おおよそ 10 ～ 15 cm 四方に集中する (図 5 ～ 図 7)。北側中央の S2 を中心とする密集部を一つの廃棄単位と考え、さらにその狭い範囲で土器片が折り重なっている出土状況からすれば、廃棄に当たって多数の土器片をまとめるための“入れ物”の存在が想定される。つまり、大形破片の打ち割りは、この入れ物に入れやすいように大きさを調整した、ということが想定される。

**廃棄行動の範囲** 流路跡の東側で出土した RP386 は、D トレンチ (p.40 ページの図 4 を参照) の 10 層から出土した RP1 と接合する (図 16)。直線距離にして、約 15m 離れている。D トレンチの 10 層段階もまた、流水を示す痕跡が認められず、湿地段階に RP1 が捨てられたことが考えられる。D トレンチ東端から E トレンチ西

端までは、調査期間の都合で未発掘ではあるが、可能性として、廃棄場の範囲が、D トレンチの東端まで延びていたことが考えられる。したがって、1ヶ所にゴミを集積させたのではなく、あまり重複しないように、広範囲にゴミを捨てていたことが考えられる。なお、D トレンチの西端以降では、火山灰層下位での古代の土器の出土は認められなかった。

### III さいごに

**展望と課題** 以上、東熊野苗畑遺跡で発見された土器集中部からは、火山灰降灰の直前のときに演じられていた、ゴミを廃棄をするヒトの姿があった可能性が高いことが、判った。それも単純に「廃棄」という一言で片付けられるものではなく、より詳細な廃棄の行動が浮かび上がってくるのである。本稿での分析が進められたのは、ひとえに土器集中部の保存状況が良好であったこと、そして詳細な記録作業を行ったことである。「その場で何が行われていたのか」と考えるには、単なる空想ではなく、多くの状況証拠を探し出し、それらの状況証拠から逸脱しないように努めていかなくてはならない。

本遺跡における土器集中部に絡んでいたヒトの行動は、当時の生活の一コマであり、古代を専門とする考古学、あるいは歴史学にとって、あまり重要でない、些細な出来事であったかもしれない。しかし、調査で実際に目の前にする遺物や遺構の出土状況は、そうした当時の生活の一コマが残された状況なのである。それを正確に読み解かなくては、遺跡で何ががあったのか、どのような暮らしが繰り返られていたのかを知ることはできないであろう。むしろ、読み取った生活のその一コマが、実は歴史的な出来事のある局面を示していた、ということも強ちあり得ない話ではない。繰り返すが、空想でない、より正確な過去の像を、そしてヒトびとが生きてきた歴史を理解するためにも、本稿で示した詳細な記録と分析は、欠かせない作業であると考えている。

しかし、まだ詰めるべき証拠もあり、また今回の復原に対する、より蓋然性を詰めるための検証実験を行う必要もあり、さらになぜ、今回復原したような廃棄行動がなされたのかについての一層の究明もあり、これらについては今後の課題としたい。

**謝辞** 本稿を作成するに当たり、以下の方々から多くの

ご教示をいただきました。記して、感謝申し上げます。  
会田容弘先生、阿部明彦さん、川崎康永さん、北野博司先生、富井眞さん、山田和史さん、渡辺和行さん、東熊野苗畑遺跡の調査に当たった多くの作業員さん（五十音順）

## 註

註1) 本稿では、一時期に流水していたことを示す“流路跡”と、それら流路跡が重複して形成した“河川跡”とを、厳密に区別している。

註2) 本遺跡で検出した火山灰については、現在分析中であるが、一般的に、東北地方の古代に堆積した火山灰として、915年に降灰した「灰白色火山灰」、すなわち十和田湖を起源とする To-a が挙げられる。本遺跡で検出された火山灰も、“灰白色”を呈した火山灰である。本遺跡の火山灰層直下で発見された土器集中部の土器型式が、編年的に8世紀後半に帰属するという指摘がある（阿部明彦氏のご教示による）。となると、編年が正しければ、土器型式と「灰白色火山灰」との間には、100年以上のギャップが生じることになる。両者の齟齬については、今後、土器集中部の炭化物の AMS 年代測定によって確認したい。本稿では、火山灰層が鳥海山起源などの、To-a でない可能性もあることから、この火山灰層を“古代に降灰した火山灰”と表記している。

註3) ハンマーが有機質の場合、その素材が持つ弾性によって、打撃直後に破片を弾き飛ばすものと考えられる。

註4) 大きさ、重さの異なる多数の石屑を皮布に入れて、皮布に入った石屑を払うように投げ捨てた場合と、足元の手前に流し込むように捨てた場合では、分布の仕方が異なる（阿子島 1985、佐川・大場ほか 2008）。前者は、重さ大きさにまともではなく、投げた方向に対応するように楕円形の範囲に、散漫的に分布する。後者は、分布が密になるが、重くて大きなものが遠くに、軽くて小さいものが足元に溜まる傾向がある。

## 参考文献

阿子島香 1985 「石器の平面分布における静態と動態—実験的研究—」『東北大学考古学研究報告』1、pp.37～62、東北大学文学部考古学研究室

宇野木早苗 2010 『流系の科学—山・川・海を貫く水の振る舞い—』、築地書館

菊池強一 2001 「リサーチ 石器の産状は何を語るか—検証の一步前進のために—」『科学（検証：旧石器発掘捏造事件）』71-2、pp.160～165、岩波書店

佐川正敏・大場正善・安倍奈々子 2008 「宮城県村田町賀籠沢遺跡の発掘調査成果—在地型原産地遺跡における石刃技術の様相—」『旧石器研究』4、pp.178～179、日本旧石器学会

富井眞 2006 「遺棄から埋没まで—弥生土器の原位置論的分析—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』pp.235～286、京都大学埋蔵文化財研究センター

ルロワ = ゲーラン 1973 『身ぶりと言葉』、新潮社

山中一郎 2004 「考古学における方法の問題」『郵政考古紀要』35 pp.1～37 郵政考古学会

山中一郎 2007 「〈研究ノート〉「動作連鎖」の概念で見る考古資料」『古代文化』58-IV、pp.30～36、古代学協会

山本晃一 1994『沖積河川学—堆積環境の視点から—』、山海堂

吉田亨 2005 『破断面の見方—破面観察と破損解析—』、日刊工業新聞社

Fréchette, V. D. (吉田 亨・宇佐美初彦訳) 1997 『脆性素材破壊解析マニュアル』、新技術開発センター

Binford, L. R. 1977 General Introduction, *In Binford ed. For Theory Building in Archaeology*, pp. 1-10, Academic Press.

Leroi-Gourhan, A. 1950 *Les Fouilles Préhistoriques (Technique et Méthodes)*,

Tixier, J. 1967 Procédés d'analyse et questions de terminologie concernant l'Etude des ensembles industriels du paléolithique récent et de l'épipaléolithique dans l'Afrique du Nord-Ouest', *Background to Evolution in Africa* (eds: W.W. Bishop and J.D. Clark)

---

ISSN 1341-397X

## 年 報

平成22年度

2011年5月26日 発行

発 行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

☎023-672-5301(代)

印 刷 株大風印刷

---

